

特261
538



0044164-000

特261-538

学校史劇

町田桜園・編

盛林堂書店

第1編

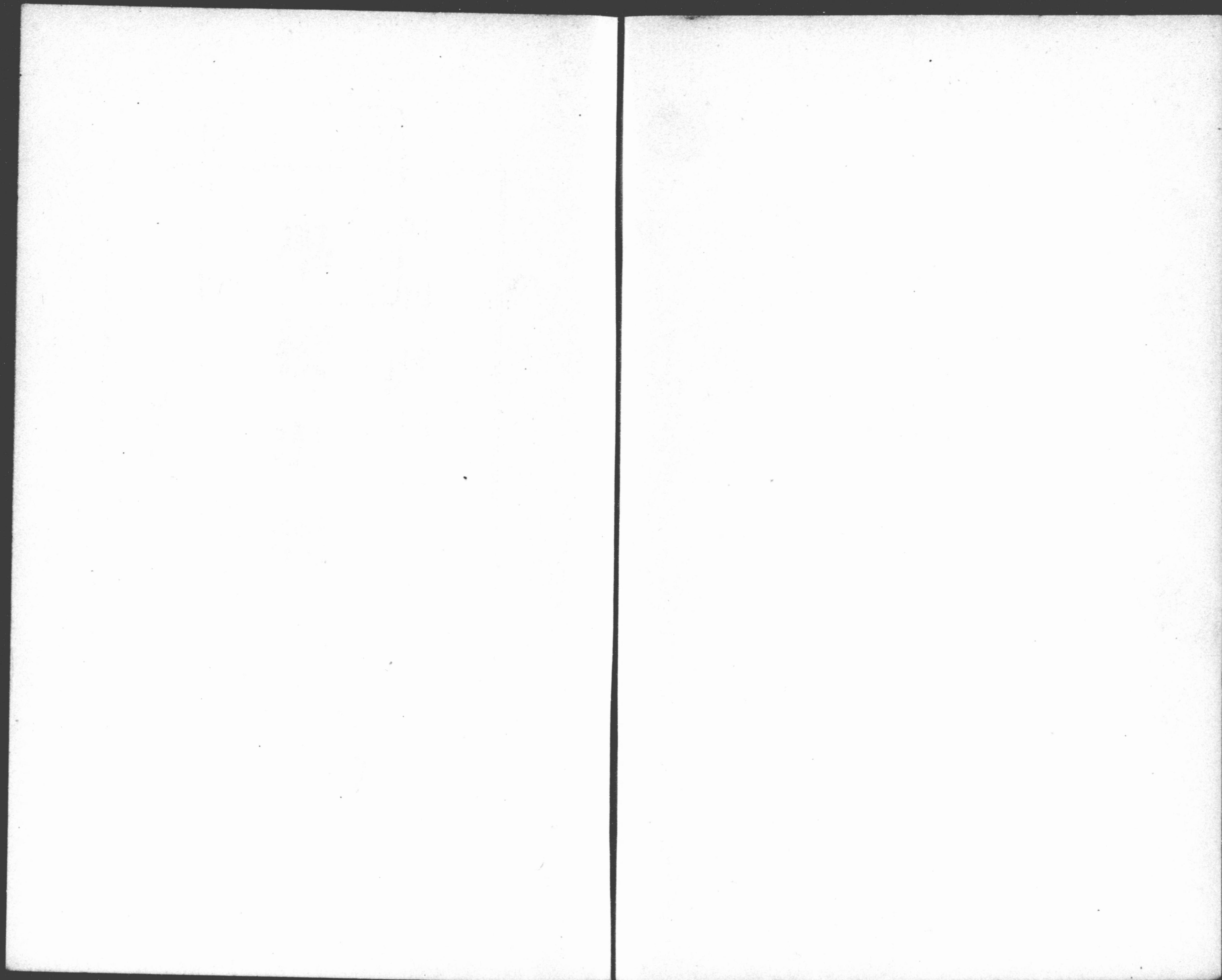
昭和2

AHF

學校史劇

町田桜園編

第一編



料26/
538



町田櫻園編

校史劇

第一編

(神代の巻一)

東京 盛林堂書店發行



學 校 史 劇

第一編 (神代の卷)

目 次

- 一 日の神、月の神
- 二 桃つぶて
- 三 常闇

◇上、神々のうつたへ

◇中、常闇

◇下、岩戸びらき

緒 言

◇米國に於ては幼稚園時代からドラマタイゼーションによつて兒童の趣味的情操を涵養し、教育的効果を擧げてゐる事は今更事新らしく云ふ迄もない、此の潮流はやがて我邦の教育界一部の人々を眼覺めさせ、兒童界に一生面を開かんと努力する傾向を生じて來たのは甚だ愉快な事である。

◇併し未だく學校と云ふ名に囚はれてドラマタイゼーションを不眞面目なる方法、然も難するに、役者の眞似をさせて何になる。「芝居の稽古をさせて何になる」と一途に寺子屋式態度を持つる教育者が多數を占めて居るを歎するのである。

◇唯編者があるの弊害と認むべきは、兒童がかゝる劇的動作に興味を有するに乘じ、徒らに公會の席に或は營利的會合に兒童劇を演せしめ、恰も舞踊のおさらひ然たる華々しき催の下に、兒童の虛榮心を助長せしめ、延いては浮薄なる人格を養成すべき全然不眞面目にして、非教育的な方法を指して云ふのである。

◇若し夫れ適當に指導して本法を教壇上に利用せんか、兒童は喜んで進んでその教科に興味を有する様になるは必然の事である、此の見地から自分は曩に「學校劇」と

題し、讀本の教材を基礎とした兒童劇を各學年配當の下に作成して公にしたのであつたが、本書の内容は嘗て文相が與へられた訓示に抵觸する事なく、然もその教科と連絡ある點に於て、教員諸賢の指導の下に着々實演せしめられつゝあるのは、本書が再版々々を餘儀なくせねばならぬ事實が適確にこれを物語つてゐるのである。

◇自分は更に歴史科に於てこのドラマタイゼーションがより多くの効果を齎すべきを信じて、茲に「學校史劇」を編して賢明なる諸彦の一顧を希はうとするのである。固より歴史科全部を此の方法に據らしむべからざるは論を俟たぬ所であるが、然も此の方法を斟酌して教授するに於ては、文物制度等の變遷等重要にして比較的教授に困難な事項も容易であると信するのである。

◇「學校史劇」に於ては歴史教科書中採つて以て興味あるべき題材と、同時にまた歴史童話をも加へる事にした、即ち第一編、第二編等は神代より上古に及び、特に神代の卷に於ては童話的興味あるもののみを選ぶ事にした、第三編以下は可成教科書と連絡を保ちつゝ進行する方針にした。

◇本書中「學校史劇」中に收めたる題材と重複せるものが往々あるが史劇は史劇として

多少其の趣きを異にして編述した、尙「學校史劇」は各學年に配當したのであつたが、本書はその式に據らず神代より順次編述する事とした、されば未だ歴史科を課せざる尋常五學年以下の學級にあつても、豫備として本書に據り適當に實演せしむるもよいと思ふ。

◇本書に收むる唱歌及樂譜は始ど自分の手に成るものであるが、特に兒童に親しみある曲は之を採る事にした。

昭和諒闇の春

町田櫻園識

演出に就ての注意

◇本書各題とも舞臺や扮装を簡略に記しておきましたが、是は兒童の集りや學藝會等の場合に、多少さうした設備を許すならばその参考にもとの心からで、平常教壇上では、無論何等の用意もいりません、畫心のある先生が黑板に適當の背景を描くなど面白い方法でせう。

◇臺詞や動作もあまり誇張に失せぬ様、また歌舞伎俳優等の特殊な臺詞廻しや表情などを故意に爲せる事は絶対に避けねばなりません。

◇題材に因つては兒童と約束し、豫め下調べをなすしめ、愈々演出に先だつて年代、何帝時代、何處で起つた事等問答するも一法だと思ひます。

◇また史劇に要する簡單な小道具類を兒童に適當の材料を以て製作せしめるのも手工科と連絡して當を得たる方法ではありませんか。

◇挿入の唱歌は可度歌はせる方がよいと思ふが、教室其の他の都合で省略しても差支へは無いのです

學校史劇 第一編 (神代の卷一)

町田櫻園編

一日の神月の神

◇舞臺 雲をゑがいた背景。
◇登場者

○説明者——普通の服裝。

○伊弉諾の神

○伊弉册の神

○日の神

○月の神

其の他風神、山、河、海、野、草、木等の神

扮装 注意の項に記しておいた通り、普通教壇で演せしめる場合は、その儘でよいが、

多少公開の場合の爲簡単な扮装を記しておく、併しこれとても指導者の意見で、適宜斟酌して欲しい。

白の割烹着の如きものが揃ふやうなら、すべての神はこれを着けること、頭には日、月、等夫々象徴した鉢巻様の輪をつける。

説明者登場

説明者。 いづれの國にも、ブツと古い昔には神話と云ふものがあります。我が國でも、この日本の國が創めて造られた時から第一代の神武天皇様に至る迄の間を神代と申して、その間にはさまざまの神話が傳へられてあります。

偕天と地と、どちらが早く開けたかと申しますると、それは天でありまして神様達のお集りになる處を、高天原と申しました、そして地はまだどろどろとした泥海の様でありましたが、こゝに伊弉諾、伊弉册といふお二人の神様が高天原からお下りになり天の浮橋の上にお立ちになりました、伊弉諾の神は天のぬぼこと云ふ矛をもつて、その泥海をおさぐりになりました、その時矛からほたりくとした、つた水が、

凝り固まつて一つの島が出来ました、この島をおのころ島と申しました、それからだんく、四國や九州が出来、つひに日本の本州が生まれました、これを大八島と申しました。

これから日の神、月の神と云ふ劇にうつります。

(以上は朗讀せしめてもよい、舞臺によつて開閉幕の装置のある場合は、説明者は幕外で以上の説明をする。)

説明者退場 すぐに唱歌隊の齊唱始まる。

唱歌 (注意。唱歌不可能の場合は齊しく朗讀してもよい)

「大八島、大八島」

立ち迷ふ霧の深ければ、

そのかげさへも、見えわかず、

闇さながらのくるしさよ。

唱歌の終りに開幕 そこに伊弉諾神、伊弉册神立つてゐる、或は歌の終りに登場する(以下

大八島

(日の神 月の神の中)

オゴソカニ

(ハ)調 4/4 1 - 2 - | 3 - 5 - | 2 - 2 3 | 1 - - ||

1 - 2 - | 3. 3 5 0 | 3 - 5 - | 6. 6 i 0 |

1. お ほ や し ま お ほ や し ま
2. オ ホ ヤ シ マ オ ホ ヤ シ マ
3. お ほ や し ま お ほ や し ま

5. 5 5 3 | 1 2 3 4 5 - | 2. 3 4 6 | 5 - 0 |

た ち ま ふ き - り - の ふ かけ れ ば
タ チ マ フ キ - リ - マ フ キ ケ シ テ
い ま こ そ か - た - ち と と の ひ め

i. i i 6 | 2 i 7 6 5 | i. i 2 3 | 2 - 0 |

そ の かけ さ - へ - も み え わ か ず
ソ ノ カ ゲ サ - ヤ - ニ ミ ト メ ナ ン
せ かい の わ - り - と あ ふ が る る

2. 2 2 2 | 3 i 6 5 | 3 4 3 6. 5 | i - 0 ||

や み さ な が - ら の く る - し さ よ
イ テ キ リ ハ - レ ヨ キ リ - ハ レ ヨ
か - み よ う ま れ よ う ま - れ こ よ

諸篇すべて幕の装置あるものとして記述しておく、随つて單に教壇にて演ぜしめる時は、そこに便宜の法を取らねばならぬ)

伊弉諾の神は先に立ち、矛を以て深い霧の中を探りつゝ、一二歩進む。

伊弉諾。折角日本の國がだん／＼固つて來ても、かう霧が深くてはどこがどこやらさつ

はりわからない。

伊弉册。全くひどい霧ですね、息もつまる様に苦しいございます。

伊弉諾。どれ一つ、この霧を吹きかけて見様。

伊弉諾の神は矛を構へ、下界を見下す様に左手を翳して稍下向になり

伊弉諾獨唱 (樂譜前と同じ)

「大八島 大八島、

立ち迷ふ霧を吹きかけて、

そのかけ爽に見とめなん

いで霧はれよ、霧はれよ、

獨唱の後フーくと霧を吹く様をする。と一方から風の神風袋を肩にかけ、右手に團扇を持ち、あらはれ出でその團扇で霧を吹き消す動作をする。

伊弉册。お、霧がはれました、霧がはれました。

伊弉諾。お、さうだ霧がはれた（と風の神を見て）お前は誰だ。

風の神一禮して

風。私は風の神であります、あれ〜霧がはれて多くの神が生れて参ります。

風の神團扇で招くと進行曲（此の曲は普通のものもよい）につれて、山、河、海、草、木の神、それ〜夫らしい象或は文字を表はした鉢巻を戴きあらはれ出る。

伊弉諾。お前達は誰々だ。

いづれも一禮して、

山。私は山の神。

河。私は河の神。

と夫々名乗る。

伊弉諾。お、さうであつたか、時に私は少し腹が減つて来た様だ。

伊弉册。私もさうです。

と云ふ時穀物の神あらはれる。

穀。私は穀物の神であります。私が生れ出ましたからは、もうお腹のお空きになる事はございません。

伊弉諾。お、さうか、大八島もはつきりした、山も河も草も木も生れ出た、まづこれで日本の形が出来た。

伊弉册。さうです、此の上はこの世界の王様におなりになる様な神を生まなければなりません。

伊弉諾。さうだ〜、神々達も共にうたへ。

他の神一同。かしこまりました。

一同齊唱（楽譜前に同じ）

「大八島、大八島」

今こそ形、と、のひぬ
世界の王と あふがるる
神よ生れよ 生れこよ

此の歌の終りに日の神、つゞいて月の神反對の方からあらはれる。

山河……の神等。 お、目も眩む様な光がさす。

草木……の神等。 世界が明るくなつた。

伊弉諾。 貴い光だ。

伊弉冊。 かうくしい神よ。

伊弉諾。 そして先なる神は。

日の神。 私はおほひるめむちと云つて日の神ぢや。

伊弉冊。 あとなる神は。

月の神。 月夜見と云つて月の神ぢや。

他の神一同。 さては日の神、月の神。

伊弉諾。 ともあれ地の上におくは勿體ない、少しも早く天へ送りまゐらせて高天原をし
ろしめす主としやう。

伊弉冊。 それが宜しうございませう。

日の神。 さて月夜見よ。 お前は今から保食の神の所へ行つて會つて來るがよい。

月の神。 かしこまゐりました。

伊弉諾。 では神々達お供してまゐるがよい。

神一同。 かしこまゐりました。

月の神は一禮して先に立つ、山河等の神も一禮してつゞいて退場する。

伊弉諾。 日の神様、今月の神様がお出になりました保食の神とはどういふ方でございま
すか。

日の神。 お、保食の神と云ふのは、人間の食物をつかさどる神なのぢや。

伊弉册。さすれば大事の神様でございますね。

日の神。お、今頃はもうあの保食の神が、月夜見の神の來た事を大層喜んで、きつといろいろ待遇をしてゐるに違ひない。

伊弉諾。左様でございますか。

こゝへ山の神、海の神急いで登場する。

山の神。大變でございます。

海の神。大變でございます。

日の神。何事がおこつたか。

山の神。されば月の神様がお出になりますと、保食の神は大層お喜びになつていろくおもてなしなされました。

海の神。まづ保食の神が、地に向つて「飯よ出る、米よ出る」と云はれて大きな口を開けますと、その口からぼろくとお米が出ました。

山の神。またこゝにゐる海の神に向つて「魚よ出る」と云ひながら口をおあけになりますと、鯛、鮪、鯡、鰹に鯛などが、その口からピチくとはね出しました。

海の神。次にまたこゝにゐる山の神に向つて「獸よ出るく獸出る」と其の口をおあけになりますと、熊に猪、鹿や猿、兎までもピヨンくと飛出しました。

山の神。あまりびつくり致しましたのでお知らせに参りました。

日の神。それは當前の事ぢや。

伊弉諾。お前方はそれを見て驚いたのだね。

伊弉册。それからどうなされた。

山の神。あとはどうなりましたか存じませぬ。

こゝへ河の神野の神あはたしく登場。

河の神。大變でございます。

野の神。大變でございます。

日の神。 どうしたと云ふのか。

河の神。 保食の神が口から吐き出されたお米に、魚や獣の料理したものを添へて、月夜

見の神に差上げました。

野の神。 すると始めから汚ならしさに御覽になつてゐらした月夜見の神様は「此の

様な汚らしい食物が喰べられるか」と夫はく大變なお腹立でございました。

伊弉諾。 え、お腹立になられたと。

伊弉册。 そして夫からどうなされた。

河の神。 いきなり劔をお抜きになつて保食の神の首を切つておしまひになりました。

一同。 え、。

と驚く。

野の神。 あれくもうこゝへお歸りになります。

云つてゐる所へ月夜見の神、やゝあらくしく歸つて来る。

月の神。 姉神様唯今歸りました。

日の神。 今すつかり聞きました。妹とは云へ、あなたの様な無慈悲な神の顔を見たくありません（と反對の方を向き）一所にゐたくありません。

月の神もせん方なく反對の方へ向く、幕を靜に閉ざす。

と、説明者再び登場。

説明者。 この事があつてから、同じ天の上に住みながら、日の神と月の神とは、晝と夜とに別れくにお住ひになり、何千年たつても御一所になることはなくなつたと申す事でございます。尙これに引つゞき「桃つぶて」と題して神話を演ずる事にいたします。

説明者退場

二桃つぶて

◇舞臺 後の方は前と同じ雲の幕でよい、前の方は普通の幕。
◇登場者

○太郎 郎 郎 郎
○次郎 郎 郎 郎
○三郎 郎 郎 郎
普通の服装。

注意 女生をして演せしめる場合は本文の對話の口調を多少改めること。

○伊弉諾の神 扮装前と同じ。

○黄泉醜女教人 扮装は黒の事務服の様なものを着け、頭に鬘體(圖にあらはした様な)を



小さく切抜いて鉢巻につけるか、或は胸に下げる。

○雷 神 扮装 成可上着を脱いだ洋服の姿がよい、頭に角を着け、小さい太鼓を

持つ。

○鬼 教 人 右に同じく角をつける。

前場は三人の兒童(男子女子いづれでもよい)が對話をしてゐる所から始る。

太郎。おい／＼もう勉強もすんだから、何かして遊ばうぢやないか。

次郎。さうだね、戸外へ出て鞠投げでもしやうか。

三郎。鞠投げはあとにして、太郎君はお話がうまいから、何か面白い話をしてくれないか。

次郎。さうだ／＼三郎君の云ふ通りだ、君何か聞かせてくれたまへ。

太郎。だつて僕はそんなに面白い話つて知らないんだもの。

次郎。何でもいゝよ。

太郎。何でもいゝつて。

三郎。ア、どんな話でもいゝよ。

太郎。きつとだね、そんなら話さう。

次郎三郎は待構へる様な態度になる。

太郎。昔々ある所にね、お爺さんとお婆さんがあつたとさ。

次郎。なアーんだ、そんな話はいやだよ。

太郎。だつて君達はどんな話だつてい、つて云つたぢやないか。

次郎。でも桃太郎の話なんぞ、ねえ三郎君。

三郎。夫でもまだ桃太郎だか何だかわからないぢやないか。

太郎。やつほり桃太郎だよ。

三郎。なアーんだ桃太郎の話か。

太郎。そんな事を云ふんなら君達に聞くがね、あの桃から生れた桃太郎が鬼退治に行つたと云ふ話が、どうして出来たか知つてるかい。

次郎。どうして出来たつて……夫りや昔からあるんだもの。

三郎。さうだねえ、ブーツと昔からあるんだつてね。

太郎。さうだよ、昔からあるにはあつたのさ、でも桃が鬼を退治する事は昔も昔、日本の國がはじめて出来てから間もない事なんだよ。

次郎。へえ、そんなに古い事かね。

太郎。あ、さうだ、そら此の前「日の神、月の神」と云ふ神代劇を見たらう。

次郎。あ、見たく。

三郎。僕も見たいよ。

太郎。その續きになるんだ、あの時、二人の神様がはじめて出てゐたね、覚えてゐるかい。

次郎。あ、知つてるよ、伊弉諾、伊弉册の神様さ。

太郎。さうだ。その伊弉册の神様が火の神様をお生みになつたものだから、大火傷をしてとうくおかくれになつて、夜見の國と云ふ地面の下の下、まつくらな國へ行

つておしまひになつたのさ。

次郎。火の神様をうんだつて。

三郎。さうして夜見の國と云ふのは地獄なんだね。

太郎。まアさうさ、そこで伊弉諾の神様は大層お嘆きになつて、伊弉册の神様におあひにならうと、夜見の國へお出になつた所、もう伊弉册の神様の姿はすつかりお變りになつて、身體中そこにもこゝにも雷の神がうづくまつて睨んでゐたものだから、伊弉諾の神様はアツと驚いて、後をも見ずにどんくお逃げになつたんだよ。

次郎。すごい話だね。

三郎。それから。

太郎。するとね「伊弉諾の神さま、逃げやうとて逃がすものか」と云つてね、黄泉醜女といふおそろしい女鬼たちが追かけて來たのだよ。

次郎。ホウ、それから如何したんだらう。

三郎。早くあとを聞かせてくれたまへ。

太郎。是からが桃太郎のお話のおこりになるんだが、丁度いゝ今皆が揃つて「桃つぶて」と云ふ劇をするさうだから、それを見ればわかるよ。

次郎。さうかい、では早く見やうよ、ねえ三郎君。

三郎。うむ見やうく。〔三人退場　すぐ蔭で次の齊唱にうつる。〕

よもつ醜女齊唱

「夜見の國から　追ふて來た

よもつ醜女が　追ふて來た、

逃げる命を　追ふて來た、

かへせ　かへせ

逃がしはやらじ

かへせ、かへせ

桃つぶての中

(ト)調 2/4
5 3 4 5 6 7 1 2 | 1 5 6 5 || 5 . 6 7 1 | 2 . 3 4 5 |

1. よーみのくにから
2. ヨーミノクニカラ

3 5 | 1 . 2 3 0 | 2 . 2 2 5 | 6 . 6 6 5 |
お ふ て き た よ も つ し こ め が
オ フ テ キ タ ラ イ ジ ン キ ジ ン ガ

6 1 | 5 . 6 5 0 | 1 . 2 3 4 | 5 . 5 5 3 |
お ふ て き た に ー げ る み こ と を
オ フ テ キ タ ニ ー ゲ ル ミ コ ト ラ

5 6 | 3 . 2 1 0 | 1 . 6 5 | 1 . 6 5 |
お ふ て き た か へ せ か へ せ
オ フ テ キ タ イ マ ズ イ マ ズ

5 . 5 1 . 1 | 2 . 2 5 | 6 . 5 | 3 - | 2 . 3 | 1 . ||
の が し は や ら じ か へ せ か へ せ
ノ ガ シ ハ ヤ ラ シ イ マ ズ イ マ ズ

齊唱終ると開幕、黄泉醜女数人手に手に葡萄と竹の子(厚紙で切抜いたものでよい)を持ち立つてゐる。

醜女甲。 あゝくやしい、逃げられた、逃げられた。

同乙。 此のまゝ、歸れば女神さまからしかられるにきまつてゐる。

同丙。 あゝとうく逃げられた。

一同。 逃げられた。
次に雷神を先頭に鬼数人、次の歌をうたひ、雷神は拍子に合せ太鼓を打ちながら右方から出る。

鬼齊唱 (楽譜同上)

「夜見の國から 追ふて来た、
雷神鬼神が 追ふて来た、
逃げる命を 追ふて来た、

いまぞ　いまぞ
逃がしはやらじ
いまぞ　いまぞ

雷神は黄泉醜女を見て

雷。これ／＼醜女達、伊弉諾の命はどうした。

醜女甲。お、雷神さま、残念ながら逃げられました。

雷。どうしてまた追いつけなかつたのだらう。

と醜女等の手に／＼持てる葡萄や竹の子を見て。

それは一體如何したのだ。

醜女乙。このおかげで逃げられました。

雷。そのおかげで。

醜女丙。はい、私達ももう少しで伊弉諾の命様に追いつかうとしますと、命は「實いな

れ實いなれ」と此の葡萄の蔓を地へなげられました。

同丁。するとどうでせう、その蔓にこれ、こんなに實がなりました、それを喰べてゐる中に、どん／＼命は逃げて行きました。

醜女甲。（注意　醜女の人数によつて、或は此の臺詞を五人目の戌に廻すもよし、また、甲、乙、丙三人のみで言はすもよい）、そこで私達はまた「忘れた／＼おう／＼」と言ひながら、どん／＼追ひかけた所、今度は命は櫛をおぬきになり、その齒を一本かいては「竹の子な一れ」二本かいては「竹の子な一れ」と地になげると、見る／＼こんな竹の子がニヨキ／＼と出ました。

同乙。うまさうな竹の子故、私達はウン／＼云つて抜いてゐる間に命のかけをと／＼見失なひました。

雷。それはお前達が意地汚なだからだ、よし／＼今度は我々が追ひかけて、きつと命を引戻して見せる、お前達は歸つてよい。

急進行曲

(ト)調 3/4

3 3 4 5 1 2 3 2 3 4 3 0 6 6 7 1 7 6 5 4 5 6 5 0

3 5 1 3 5 1 2 3 2 3 2 5 6 1 5 6 1 5 6 5 6 7 1 3 1

3 3 4 5 1 2 3 2 3 4 3 0 6 6 7 1 7 6 5 4 5 6 5 0

3 5 1 3 5 1 2 3 2 3 2 5 6 1 5 6 1 5 6 5 6 7 1 3 1. 0

醜女甲。 それでは雷神様、私達は歸つてもようございますか。

雷。 よしく早く歸れ。

醜女甲。 夫では皆さん後は雷神様や鬼さん達に願ひして、私達はこの葡萄や竹の子を

かぢりく歸りませう。

醜女一同。 さうませう、あ、甘さうだく。

醜女達はその葡萄や竹の子をかぢる様をしつゝ、雷神の追ふて来た方へ歸る。

雷。 いやはや喰意地の張つた醜女どもだ、さア皆足のつゞくだけ、かけてくあの伊弉

諾の命に追ひつくだ。

鬼一同。 よいともく。

雷。 それ行け。

鬼一同。 ハツ。

前の鬼の齊唱をくりかへしつゝ、反對の方(舞臺左方)へ去る、と舞臺係出て下手(向つて左)

舞臺の約束として舞臺へ向つて右方を上手、左方を下手と云ふ事は、拙著「學校劇」にも屢々記しておいた。寄に桃の木——何の樹を代用してもよい——に作物の桃の實數箇貫のれるを置く、やがて急速な進行曲につれて伊弉諾の神は劍を抜いたまゝ上手から走り出る。

伊弉諾。おゝもう此處は夜見の國と人間界の境のよもつ平坂だ、葡萄の蔓や、櫛の齒を

かいてあの追手をまいてしまつたが、まさか此處迄は追つては來まい。

一息ついて劍を鞘におさめると同時に、上手の蔭で雷神達の齊唱（前と同じ）聞える。

伊弉諾。や、や、さつきの醜女達ではない様だ、何、雷神、鬼神が追ふて來ると、はて

どこか隠れる所でもないかな。

と四邊を見廻し、桃の樹に眼をつけ。

ウムあの桃の樹のかげに身をかくさう。

命は下手の木影にかくれる様にする、と上手から。

雷神。それ鬼共急げ〜。

と雷神を先頭に、鬼共どや〜とあらはれ。

鬼。どこだ〜、命はどこだ。

と搜し廻る、命は桃の實一つを取り。

伊弉諾。鬼共喰へ 桃つぶて エイツ。

と桃の實を投げる、雷神は手に持った太鼓を飛ばされる。

雷神。アツ大事の〜太鼓が無くなつた。

伊弉諾。も一つ喰へ 桃つぶて エイツ。

また一つを投げる、雷神たまたま逃げる。

雷神。アツ痛ツ、痛ツ、かなはぬ〜。

上手に走り去る。

伊弉諾。ウムもう一つ喰へ、桃つぶて。

と鬼共の方へなげる。

鬼一同。ワーツ、かなはぬ〜。

前後を争つて上手へ逃げ去る。

伊弉諾。あれ〜逃げて行く、逃げて行く、もう大丈夫だ。

と前方へ出て上手を望み、ふりかへつて桃の木の傍に寄り。

伊弉諾。桃の木よ、お禮を云ふよ、有がたう、誰に限らず日本人達が難儀にあつた時

は助けてやつておくれ、私はお前に大神實の命と云ふ名をあげやう、悪い鬼と見た

ならば桃よ、お前が出て退治ておくれ。

と桃の樹を撫でる、閉幕、或は退場。

三 常 闇

注 意

天の岩戸は「學校劇」にも載せておきました、併し、それは讀本教材によつたもので比較的幼年兒童用にしてありますが、こゝには上級生の爲上、中、下三段に別つて脚色しました、但し都合上その一部を演じてもよいと思ひます。

上、神々のうつたへ。

中、常闇。

下、岩戸びらき。

◇舞臺 上中下とも同じでよい、即ち後は一面の黒或は鼠色の幕中央には岩屋を作り、岩戸をたてゝある。

◇登場者

○大神の侍神——扮装、不敬に涉らぬ程度にする、白い長い着付、薄い白のヴェールでも頭から被り頸に珠の飾りをする。

(注意 無論大神であるが代りにある女神として演せしめるのである)

○素盞鳴命——扮装、伊弉諾命等と同じ。

○諸々の神達数人

- 思兼の神
 - 石凝姥の神
 - 玉祖の命
 - 天兒屋根の命
 - 天佃女の命
 - 天太玉の命
 - 手力雄の命
 - 鶏敷人
 - 説明者
- （女神）
- 扮装、鶏の頭の作ものを頭にいたゞく。

説明者幕外に登場。

説明者。例によつて一言説明いたします、天照大神様のおん弟神、素盞鳴命様は至つて
 氣の荒い神様で、或時はすでにおかくれになられたおん母伊弉册神様に逢ふのだと
 云つて、夜見の國に行かうとなされたり、その他種々の我まゝを爲しましたが、おん
 姉大神様はいつもやさしくおもてなしなさるをよい事にして、とう／＼此の世を闊

とする程の亂暴をせられました、是より上、中、下に別つて御覽に入れるのですが、
 特にお断り致しますのは單に大神と申すのは無論天照大神様を云ふのですが、こゝ
 では餘りに恐れ多いので、大神様のお代りの神と云ふ心であります。では是から始
 めます。
 「説明者退場 直に開幕。」

上、神々のうつたへ

舞臺は空虚になつてゐる、やがで、下手から諸々の神達蔭から歌ひつゝ登場。
 （注意 唱歌は一同が舞臺に出終ると同時に終る位にする）

神々の齊唱

「お訴へ申さう、お願い申さう」

弟神様の あのいたづらは

日ごとにますます／＼荒ぶるばかり

神々百姓なげきになげく。

上
常闇の中
神々のうつつたへ

アハレヲオビテ

(ト)調 $\frac{2}{4}$ 3 3 | 3 2 1 7 6 3 | 1 7 | 6 - ||

3 6 7 1 2 | 3 3 | 6 2 3 1 7 | 6 6 |
お う つ た へ ま さ お ね が ひ ま さ

7 1 7 1 | 7 1 2 | 2 3 2 3 | 2 3 4 |
お と が み さ ま の あ の い た づ ら は

6 6 2 4 | 3 3 1 6 | 7 1 7 6 | 7 7 6 0 |
ひ ご と に ま す ま す あ ら ぶ る ば か り

3 6 7 1 2 | 3 3 | 6 2 3 1 7 | 6 7 | 6 - ||
か ん が み ひ く し ゅ な げ き に な げ く

神の一。大神様にお訴へ申し上げます。

同二。大神様にお願ひ申し上げます。

神の一。お訴へ申し上げます。

一同。お訴へ申し上げます。

神の二。お願ひ申し上げます。

一同。おねがひ申し上げます。

聲を揃へて叫ぶ、と上手から大神の侍神(女神すべて大神の心)しづく^てと出て来る、一同禮拜する。

侍神。打揃つて訴へとは何んな事か、願ひとは何の様の事か。

こゝで神々達はまた前の歌をくり返し歌ふ。

侍神。ウム弟素盞鳴命のいたづらを訴へやうといふのですか。

神一同。さやうでございます。

侍神。あれは大神様の大事の弟神です、どの様ないたづらをしましたか。

神の一。先づ大神様の御料である天の狹田長田と申す田へ、最早百姓達がすつかり種蒔をすました後へお出になつて、また後からめちやくちやに種を蒔きちらされました。侍神。さうですか、それは多分弟神が、前に種蒔がすんであるのを知らなかつたのでせう。

神の二。次には田に水が足りないので溝を掘つて水を通ずる様にしてある、その溝を埋めてしまひました。

同三。またこちらでは水があり餘るので、畦をこしらへて水を堰いておきますと、その畦を崩すものですから、田の中は一面の沼となつてしまひました。

同四。ある時は百姓のつまづく様に杭を横たへたり。

同五。またある時は何にも知らず働いてゐる百姓の處へ馬を追こんだりせられます。

侍神。ム、畦を崩したり、溝を埋めたりするのも、大方土地を少しでもよくしやうとい

ふ心から出た事であらう。

同六。唯今まで申しあげた事はよいと致しましても、凡そ此の上もないおいたづらと存じますのは、大神様がお初穂を召上がられますあの清らかな御殿を、何とまア汚ないものですつかりおよごしなさいました。

侍神。お、さうか、夫も大方命がお酒にでも酔つて、苦しまぎれにした事に相違ない、併しお前達の訴へや願ひはよく心にとめておいて氣をつける事にしませう。

神一同。どうぞお願ひ申します。

侍神。それではお別れいたしませう。

神の一。どちらへお出でございます。

侍神。機織屋へ行つて機織の様を見様と思ひます。

神の二。お、あの齋服殿へお出でございますか。

同三。ではそこ迄お供申しませう。

素盞鳴命獨唱

ツヨク

(ハ)調 $\frac{2}{4}$ 5 0 5 0 | 5 1 5 || 5 3 4 5 1 | 6 6 6 |

1. か みーが み た ち の
2. ア ネーガ ミ サ マ ラ

6 6 7 1 2 | 1 1 1 | 1 3 2 1 1 | 6 6 5 |

き もーを は ひ や す い た づ ら の た ね は
オ ド ロ カ シ マ ツ ル イ タ ヅ ラ ノ タ ネ ハ

5 6 5 3 4 | 2 2 5 0 | 5 5 5 5 | 5 6 5 |

そ こーら に な い か ひ や く し ゃ う ど も の
ソ コーラ ニ ナ イ カ ハ タ オ リ ド モ ノ

3 1 2 3 1 2 | 3 6 5 | 6 1 1 6 1 |

う ろーた へー さ わ ぐ い た づ ら の
サ ケー ビ ヲー ア ゲ ル イ タ ヅ ラ ノ

5 5 5 | 3 3 2 1 2 | 3 5 | 1 - ||

た ね は そ こーら に な い か
タ ネ ハ ソ コーラ ニ ナ イ カ

侍神。お、そんなら機織屋近くまで。

神の一。どれお供いたしませう。

大神の侍神を先に神々一同はついでて下手に退場、間も無く上手より素盞鳴命一同の後を見送る様にしてうたいながら出る。

素盞鳴命獨唱

「神々たちの きもをば冷やす

いたづらの種は そこらにないか

百姓どもの うろたへ騒ぐ

いたづらの種は そこらに無いか。

素盞。アハ、、、神々達はたまりかねて、姉神様に訴へに來たな、私の事を散々に訴へて行つたな、ハ、、、でも素盞鳴がいたづらはまだ是からだぞ、姉神様は機織屋へ行つておいでになるんだな、よし、何かうんといたづらして、あの姉神様

を驚かして見たいな。

素盞鳴獨唱

「姉神様をおどろかしまつる

いたづらの種はそこらにないか

機織どものさけびをあげる

いたづらの種はそこらにないか。

命は種々に歌ひながら考へ、遂に思ひついた心で。

素盞。うむあつた、あつた、い、事を考へついた、あの天の斑駒といふ大きな馬の、生

皮を逆むきに剥いで、機織屋の屋根へ投げつけてやるんだ、さうすれば、きつと屋

根をつきぬいて、血みどろになつた馬の身體は、機織場の中へ轉がり込むに違ひな

い、さうだ、これは面白い、面白い。

と手を拍ち、足を踏みならす 閉幕。

中、常 闇

◇舞臺 前の通りでよい、若し照明の設備があつて明暗が自由であるなら、此處はブツと暗く

して僅にそこ、で燃やす生木のおぼつかない火の光で薄明るく見える位にする、

併しこれは理想的の註文で、必ずしもかうする要もない、唯演者がさういふ心にな

る事は肝心である。

こゝに前場の神々達（人数の増減は適宜）より集り、いづれも不安氣にうづくまつてあ

る、その齊唱で開幕。

神々 齊唱

「いつを晝

いつを夜との別ちなく

世は常闇となりはて、

安の河原の安からず
禍くるひあれまはる。

中 常 闇 の 中 神 々 の 齊 唱

アハレニ

(二)調 4/4 3 6 7 2 3 2 1 7 6 7 | 3-0 || 3 3 2 1 7 | 6-0 |
い つ - を ひ る

6 7 1 2 3 | 3 3 4 5 6 | i i 7 6 7 | 3-0 |
い - - つ を よ る - と の わ か - ち な く

1. 1 1 3 | 6. 6 7 - | 2 3 4 6 5 | 6-0 |
よ は と こ や み と な り - は て て

6. 7 7 6 | 7. i 7 6 | 5 6 4 3 2 | 3-0 |
や - す の か は ら の や す - か ら す

1 7 6 7 3 | 1 7 1 2 3 - | 6 3 2 1 7 | 6-0 ||
わ ざ わ ひ く - る - ひ あ れ - ま は る

歌が終ると一同はまた首うなだれて憂に沈んでゐる、舞臺裏のかげから。

泣く神。 あゝ此の世はどうなつてゆくのだらう、親や兄弟の顔も此の燃えてゐる火の消

えると一所に見えなくなるのだ。

泣く神一同。 ア、かなしやかなしや。

笑ふ神の聲。 アハ、、、、また泣いてゐる、また泣いてゐる、泣いた所でどうなる、

アハ、、、。

笑ふ神一同。 アハ、、、。

怒る神の聲。 ばか、ばか、何がおかしい、一條の光さへ無くなつてしまふのだぞ。

怒る神一同。 莫迦、莫迦、莫迦。

笑ひ怒る聲入亂れて聞こえる、舞臺の神面をあげる。

神の一。 あゝまた始つた、悲しんでいゝのか、笑つていゝのか、いやさうぢや無い、み

んな氣が狂つてしまふんだ。

同二。さうだとも、もとを云へばあの素盞鳴命様の亂暴からおこつた事だ、よくく大神様もお腹立ちになつたに違ひない。

同三。お腹立ちになるのも無理はない、生皮を剥いた馬を機織場に投げ込んだもの。

同四。機織女は死んでしまふし、大神様もお怪我をなすつたと云ふぢやないか。

同五。此の岩屋にお這入りになつた限りで、もうどの位時が立つか日が立つかわかりやしない。

神の一。それくその生木の火ももう消えるぞ。

同二。さあまた燃やす木を集めねばならぬぞ。

再びかけから。

泣く神。あゝ悲しや、かなしや。

笑ふ神。アハ、、、まだ泣いてる アハ、、、。

怒る神。莫迦、々々、々々。

の聲亂雑になつて響いてくる、もう今度は舞臺にゐる神も何にも言はず打しほれてゐる、こゝへ下手から思兼の神、右手に太き枝に火を付け（紅い綿をつけたのでよい）たるを持ち、足元危げに出る。

思兼。神々達、もう集つておいで、したか。

神の一。誰方でございます。

思兼。私は高産靈神の子思兼の命と云ふ者です。

神の二。あ、知つてゐます、思兼の神殿は、高天原で、一ばん考への優れてゐる方です。

思兼。さう褒めてはいけません、とにかく私の考へをお話しいたしませう。

神一同。どうぞお願ひいたします。

注意

こゝで思ひついたから云ふが、小學校や其他兒童の集りでかうした種類のものを演ずる時、一同が揃つて云ふ言葉だが、指導者が強いて揃へ様とする爲に一種妙な口調になつて滑稽な感を起した事が屢々あつた、たとひ不揃ひにならうとも自然に言はせる様にした、尤もリズムミカルな場合は別だが。

こゝで思兼の神は中央に坐し、其の他の神々は左右に別れて坐す。

思兼。大神様がかうして（と岩屋をかへり見）岩屋へおはいりになり岩戸をしつかり閉ざされたからは、なか／＼容易な事ではお出になりますまい、そこで大神をたばかつて引出すより外に手だてはないと思ひます。

神達一同無言でうなづく。

思兼。そこで大神様が世の中をお照らしなさる光は、まづよく／＼澄みわたつた鏡と同じではあるまいか。

神達またうなづく。

思兼。そこで私の考へでは、大神様のおすがたに象つた御鏡をこしらへ、その光で大神様をお引出し申さうと思ふのです。

神の一。ア、これは成程よいお考へです。

同二。さすがは思兼の神殿のお考へです。

思兼。それから誰か鶏を澤山集めて下さい。

神の三。宜しふございます。

思兼。石凝姥命はおいで、すか。

石凝。はいこゝに居ります。

一隅から石凝姥命出て来る。

思兼。あなたは天の安河の河上から岩をはらひ、天の香山の鐵を、その岩で鍛へて鏡を作つて下さい。

石凝。承知いたしました、澄んだ曇のない鏡をきつと作り上げませう。

思兼。玉祖の命はおりませんか。

玉祖。はいこゝに居ります。

他の一隅から玉祖の命出て来る。

思兼。あなたは御苦勞ですが、八尺瓊勾玉を作つて下さい。

一同齊唱

イサマシク

(ニ)調 $\frac{2}{4}$ 1. 3 5. 6 | 5 0 5 0 | 1. 3 5. 6 | 5. 0 ||

1. 3 5. 3 | 2. 1 2 | 5. 6 5. 6 | 5. 0 |
た か ま が は ら を て ら す て ふ

i. i i. 6 | 5. 6 5. 3 | 2 1 2 3. 2 | 1. 0 |
や - た の み か が み く も - り な く

3. 3 5. 3 | 2. 2 2 | 1. 3 5. 6 | 5 0 6 |
ま た う る は し き ま が た ま は と

i. 6 | i. 2 i. 6 | 5 6 5 3 5 | 2. 0 |
も に み く さ の み た - か ら と

2. 2 1. 2 | 3. 5 6 | i. 6 5 2 | i - ||
す 点 の よ な が く の こ る ら ん

玉祖。 勾玉は美しいきれいなのを作りあげませう。
 此の時また蔭からさまぐくの罵りさわぐ聲がする。
 思兼。 さア皆さん、世界の光の取戻す爲に、勇氣を出してとりかゝらうではありませんか。
 石凝。 さうですく私はずぐに御鏡を作りませう。
 玉祖。 私は勾玉をこしらへませう。
 一同立上り勇み立つたる齊唱になる。

一同齊唱

「高天原を照すてふ
 八咫の御鏡くもりなく
 またうるはしき勾玉は
 共に三種の御寶と
 末の世ながく残るらん。」

閉幕

下
岩戸びらきの中
兒屋根命獨唱

(ト)調 4/4 5-1- | 2-2 3 | 1-6- | 5-- | 3-3- | 5-1 4 |

3-2- | 1-- || 5 1 1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 3 3 3 3- |

かけまくもあやにかしこきおほがみの

3. 3 3 2 | 3 5 2- | 1. 1 6 6 | 5- 0 |

みまへにつどふももちぢの

1- 2 3 | 2 2 5 3 | 2 3 2 2 | 5- 0 |

かみのねがひをいれさせて

6 6 6 5 | 6 6 6 5 | 1 2 3 4 | 5- 0 |

ふたたびかがやくてんじつの

5 5 6 4 | 3 3 2- | 5- 6 1 | 2-2- | 1- 0 ||

ひかりをあたへたまへかし

下、岩戸びらき

◇舞臺
前と同じ、但し岩屋のや、下手に寄せて櫛の木（似寄りの木を代用するも可）上の枝に
勾玉、中の枝に御鏡（何れも厚紙細工）をかけ、下枝には白布を垂れたるを置く、所々
には篝火（これは普通の薪木でも組合せてよい、岩屋を中心にして上手には手力雄の命、天太
玉命、天佃女の命（女神）——葛の蔓をたすきにかけ、笹の葉を手を持つ）ひかへて居る、岩屋よ
り下手には小さき弓を持てる神數人、弦を鳴らす様に構へてゐる、つゞいて拍子木、太き丸木二
本）を持てる神數人、尙つゞいて下手に鶏數人並んでゐる、天兒屋根の命は中央岩
屋に向つて立つてゐる、兒屋根の命の獨唱の中途から

開幕。

兒屋根命 獨唱

「かけまくも あやにかしこぎ

おほ神の

みまへに集ふ 百千々の

神の願ひを いれさせて

再びかゞやく 天日の

光を あたへたまへかし、

兒屋根の命一禮して上手を岩屋のわきに坐す。

兒屋根。用意よくば神々達。

神一同。おう。

と答へると同時に樂おこる。

一同 齊唱

「おもしろや おもしろや

天のかぐ弓 ひきならし

かぐらの まひをいさまはう

よいや よいく よいやよい

ふむやとんく足拍子

一と二た三いつまでか

岩屋にかくれますぞ。

神達は弦をならし、拍子を打つ、天佃女の命は中央に据ゑた盃(實物の盃を伏せ、鼠が茶色の紙で被ひたるもの)の上に立ち、笹の葉を振り足拍子を取つて舞ふ。

注意 舞の手ぶりは簡単に手足を動かすのみでよい。

神々の齊唱

(變口調) 2/4 7 7 | 7 3 6 7 | 3 3 | 3 6 2 3 || 7 7 7 6 7 6 |

1. おもしろや
2. オモシロヤ

7 7 7 6 7 || 7 3 6 7 3 | 7 3 6 7 || 3. 3 3 2 | 3. 4 6 4 |

おもしろや あまのかがゆみ
オモシロヤ ツーバサカハジテ

3. 3 3 2 | 3. 0 | 3. 3 3 1 | 7. 7 7 6 | 7 7 6 4 |

ひきならし かぐらのまひをいざ
フリハヘ テ カグラノウー タヲイサウタ

3. 0 | 3. 2 3 | 7. 6 7 6 | 3. 2 7 6 | 7. 0 ||

うよいよよいよいよ
ハウ コーッコケコケコ コケコッ

7 3 1 7 | 7 3 1 7 | 3 3 3 3 | 6 3 4 3 || 7 7 6 |

ふむや
コーッコ

7 6 7 6 | 1 7 6 4 | 3. 0 | 2. 2 3. 3 | 4. 4 6. 7 |

とんとんあしひやし ひいふたみいよう
ケコケコ コケコッ コ イツムウ ナナヤア

3. 3 2 2 | 3. 0 | 7. 7 7 6 | 7 6 4 | 3 3 3 2 | 3. 0 ||

いつまでか いはやかにくれましすぞ
コノイハト ハヤクモヒ ラキ タマヘカシ

鶏齊唱 (樂譜同上)

「おもしろや おもしろや
つばさかはして ふりはへて
かぐらのうたを いざうたはう

コツコ ケコケコ コケコツコ
コツコ ケコケコ コケコツコ
五つ六う七 ハア この岩戸
早くも ひらきたまへかし

鶏は羽搏きする様な動作をしつゝ、佃女命の周囲を廻る、佃女の命は岩屋の方を見て。

佃女。大神様、私は天佃女の命です、まア此の面白さを御覽なさいまし、あれ〜岩戸

が細目にあきました。

兒屋根。それ太玉の命御鏡を。

太玉。ハッ。

太玉の命は鏡を取つて岩屋の方にさしつける。

太玉。お、岩戸は開くぞ。岩戸は開くぞ。

兒屋根。何、岩戸は開くと云ふのか、誰かあの戸をあけて見ないか。

手力雄。この手力雄の命がつとめませう。

大力雄の命立つて岩戸に両手をかけ。

手力雄。えいや、えいや、えいや。

と懸聲して戸を少し開く。

兒屋根。アッ戸は開いた、お、神々しい光がさした。

神一同。萬歳 々々。

一同立上つて両手をあげ喜ぶ。閉幕。

編者附記。神代の巻は上下二篇で完結する豫定でゐましたが或は上、中、下三篇に涉

るかも知れませんが、前にも記しましたが歴史教科書としては此の三篇は大して重要なものでないかも知れませんが、神話として単に演出せしめるのも有益にして興味があると信じます、神代の巻から續いて上古からは教科書と並行しつゝ時に傳説的で興味ある史談をも採り入れて行きたいと考へてゐます。

昭和二年五月廿日印刷
昭和二年五月廿日發行

〔定價金六拾錢〕

無斷禁興行
學校史劇
複製不許

著者

町田 櫻園

發行者

林 甲子太郎

印刷者

高橋 賢治

印刷所

高文堂第一印刷所

發行所

東京市日本橋區本銀町三丁目八番地
書肆 盛林堂

賣捌所 全國各書店及樂器店
(圖書目錄御入用の方は
郵券二錢封入乞御申込)

電話日本橋(24)三六六九番
振替東京一八四六番
口座名古屋一〇五二九番

□新刊大好評

町田櫻園先生編

教科書を中心としたる

兒童新舞蹈と遊戯

定各金八拾錢

書留各金拾六錢

本書は漫然と編述したものではありません多年兒童藝術に經驗ある編者が、新に小學校教科書を中心とし、教室に運動場に或は會合の席上に愉快に動作し得る様懇切叮嚀に説明し清新なる歌曲をも一々挿入した良書であります。
一學年から各學年別に出版する豫定でありますから、發賣の上は多大の御歡迎と御賞讚ある事は信じて疑ひません。

學 校 劇

學 校 劇

町田櫻園先生著 大好評(七萬五千部 突破ス)

〔菊判大和綴美本〕

尋常一年全一冊
尋常二年ヨリ各上下
尋常六年マデ二冊
定價各金六拾錢
書留送料各金拾六錢

▼文部大臣の論達に抵觸せぬ

本書の眞價を知られよ!!

「劇」といふ語が、不穩當ならば何と命名しても構ひません、要するに情操的教育の資料として特に國定教科書に連絡ある題材を採つてその學年程度の兒童に演出せられる様然も興味も亦豐富なるべき様作つたものです。

されば學校に於ける諸種の會合の場合、該脚本に依つて適當に演せしめられたならば教科書を活用せしめ得ると同時に高雅なる趣味性の涵養にもならずと思ひます米國のある幼稚園や小學校では夙に「ドラマタイゼーション」を採つて各學科に活用せしめ大に効果を擧げてゐるとの事です、今はもう徒らに教科書を素讀的に注入的に授けてゐる様な時代ではありません、何卒獨り本書のみに非ず、本書の如き形式によつて情操方面の教育にも盡されんことを當の先生方に御願致す次第であります。

學 校 劇

尋常一學年



【次目冊一全】

ねぼうの太郎さん
ひらやみの神さま
くらやみの神さま
おきやくあそび
さるくとそび
とろけたるこま
やまびこ

尋常二年の上



町田櫻園編
學 校 劇
上の年學二年

【次目巻上】

コレガステンテカラ
牛馬裁方判
四子へんじ
はな子のへんじ
右とろ
羽ごるも

尋常三年の上



町田櫻園編
學 校 劇
第三學年の上

【次目巻上】

天の岩屋
菜島の蝶
船の上とたみの上
かめわり柴田
松虫鈴虫
ひよどり越え
つばめとすいめ

尋常二年の下



町田櫻園編
學 校 劇
下の年學二年

【次目巻下】

ふたりのねがひ
しくじりふくろう
日とこぞう風
とんちこのぞう
森の鷺とこの鷺
扇のまじまじ
さゞえのじまん

尋常三年の下



町田櫻園編
學 校 劇
第三學年の下

【次目巻下】

山のすらがたべ
海ののすがた
霜ののきき宿
雷ののきき宿
磁石のきき宿
かぐやひめ
しわんぼうか儉約か

尋常四年の上



町田櫻園編
學 校 劇
第四學年の上

【次目巻上】

盲人に提灯
學校劇の參觀
(蠶家の紋曾我兄弟)
日本紙と西洋紙
月の小兎
鎌倉攻

尋常四年の下

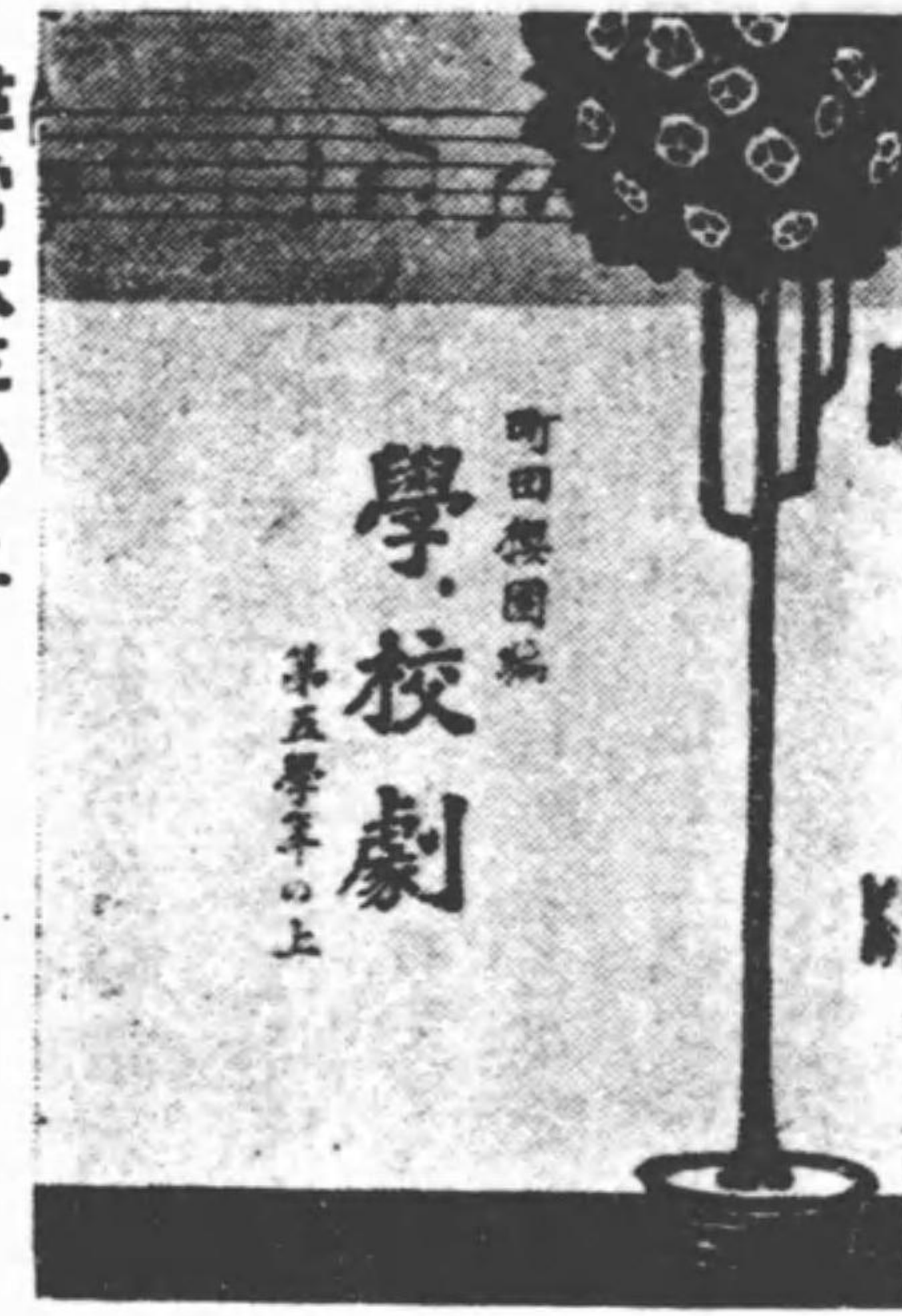


町田櫻園編
學 校 劇
第四學年の下

【次目巻下】

三郎のゆめ
手賣る家
こがら
禁断の池
税中
羊おひ
橋佐ひ

尋常五年の上

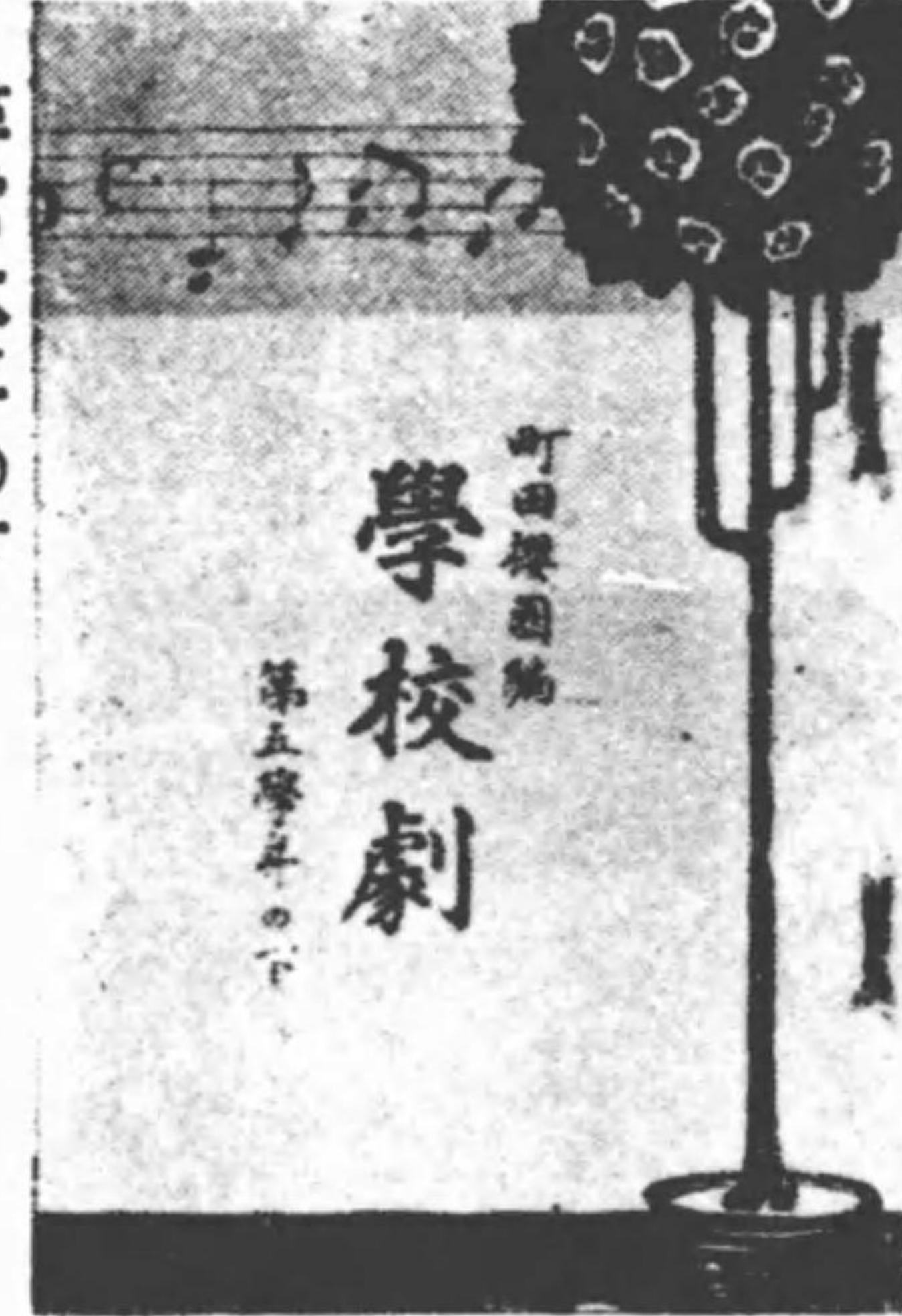


町田櫻園編
學 校 劇
第五學年の上

【次目巻上】

昔と今の旅
雪の兔
野あそび
水兵の母
北斗星と北極星

尋常五年の下



町田櫻園編
學 校 劇
第五學年の下

【次目巻下】

薬と密書
霧がく
奈良めぐり
なさを曾我
たしかな保証
虫とり草

尋常六年の上



町田櫻園編
學 校 劇
第六學年の上

【次目巻上】

光の威力
なくなつた髪留針
裁判あそび
熊王丸
かへらすの森

尋常六年の下



町田櫻園編
學 校 劇
第六學年の下

【次目巻下】

稲佐の演
夜くらべ
喜瀬川の対面
太平洋と國旗
りゃ王の話

簡易童話劇集

町田櫻園先生編著 (新刊)

簡易童話劇集

〔菊判大和綴美本〕 定價各金五拾錢 書留送料 各十四錢

「學校劇」すべて拾壹篇は時代に適應した書として、全國の教育界に歡迎せられ、實演せられつゝあります。畢竟「劇」といふ名は冠してあつても内容が教科書と連絡を保ち趣味と娛樂の裡に、情操教育の途に上れるからでありませう。編者はかく信じて稿かに喜んでおります。

そこで「學校劇」の姉妹篇として筆を更めて本書を公にする事にしました。「學校劇」は各學年別に、そして一篇數種を収めたのでありましたが、本書は一篇一種或は二三種とし、尋常科以上の生徒の爲、時に或は幼稚生の爲、隨時趣味と教育とを兼ねた童話から材を採り、また或は創作して、學藝會やその他の會合の實演に適する様との方針で取りかゝりました。

尙毎篇とも何れも編者の指導する歌劇場の實演を経た上のものですから、實演に際して無理な所はなく、またステージ上の効果をも考慮し、或は訂正の上出版したものである事も申添へておきます。

第一篇は、シンドラを翻案した「靴の主」でしたが、二篇は夫れより

簡易童話劇集

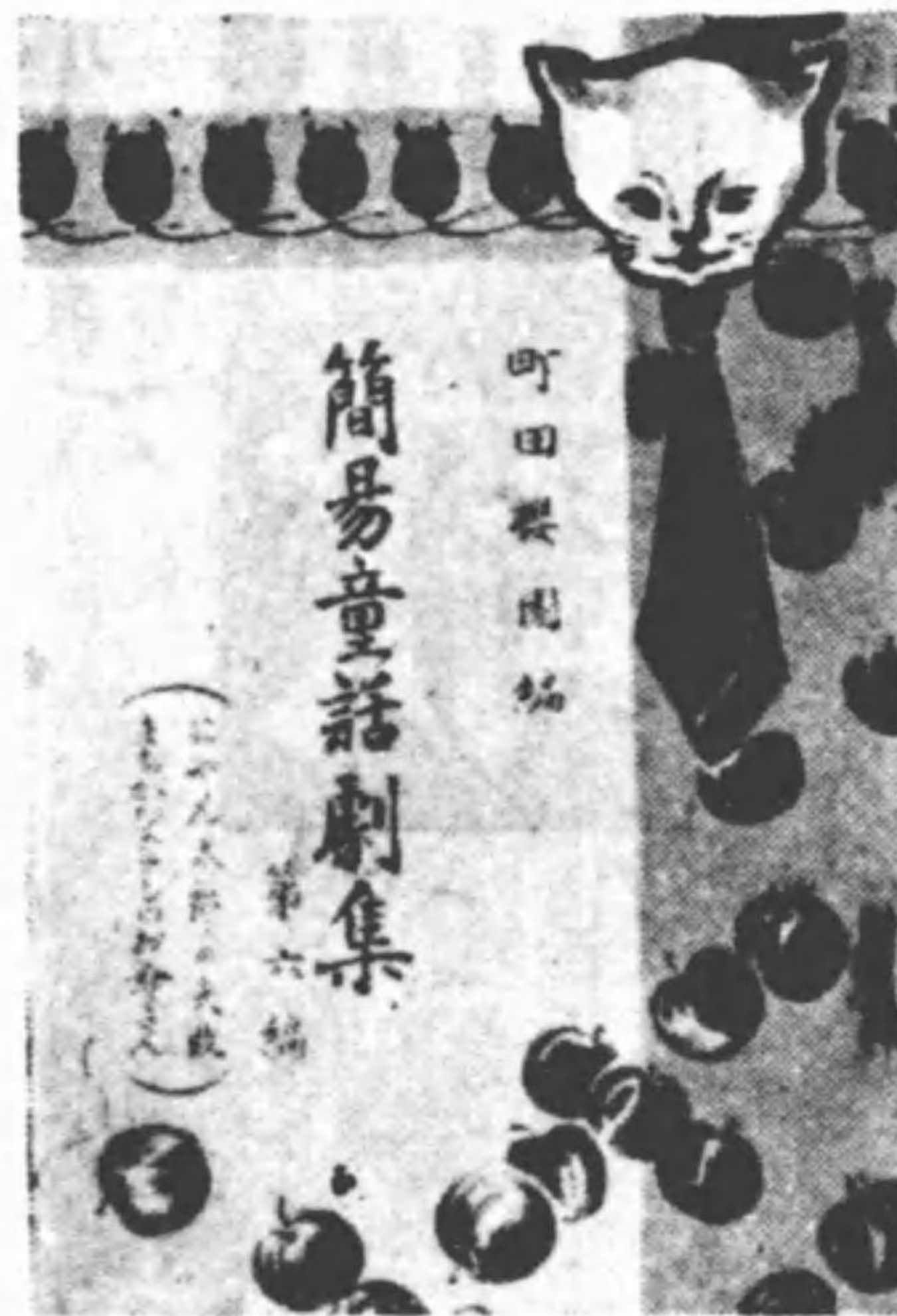
程度の低いお兒達の爲、二種を選んで脚色しました。第一はアンダーセンのお話から、第二は日本の昔話を多少創意を加へて「とんく拍子」として出版する事に致しました。尋常三四年以上としてありますが、夫々程度に應じて取捨して下すつてもよいと存じます。

第三篇は、矢張アンダーセンの童話から取材しました。そしてこれは女生の方達に演り易い様にしてあるし、劇的效果もある事と思ひます。是非實演して下さいる様希望します。

第四篇は本邦童話「しみのすみか」中の一篇を採り、それを脚色しました。これは小生のたづさはる花月園の童話劇として上演して、相當効果があつたと自信してゐます。そして高等小學程度の少女達なら充分に演りこなせるし、尋常六年位でもさして困難では無いと思ひます。

第五篇は幼いお兒達の爲め三種を選びました。第一、第二は新作、第三新イソップ物語をアレンジしたものです。第一のものは「はね子の手がら」第二のものは「寝坊の太郎さん」と題して多少の相違はありますが、嘗て合同著音器會社富士山レコードに著者自ら指導して吹込んであります。多少の御参考ともならうと思ひます。

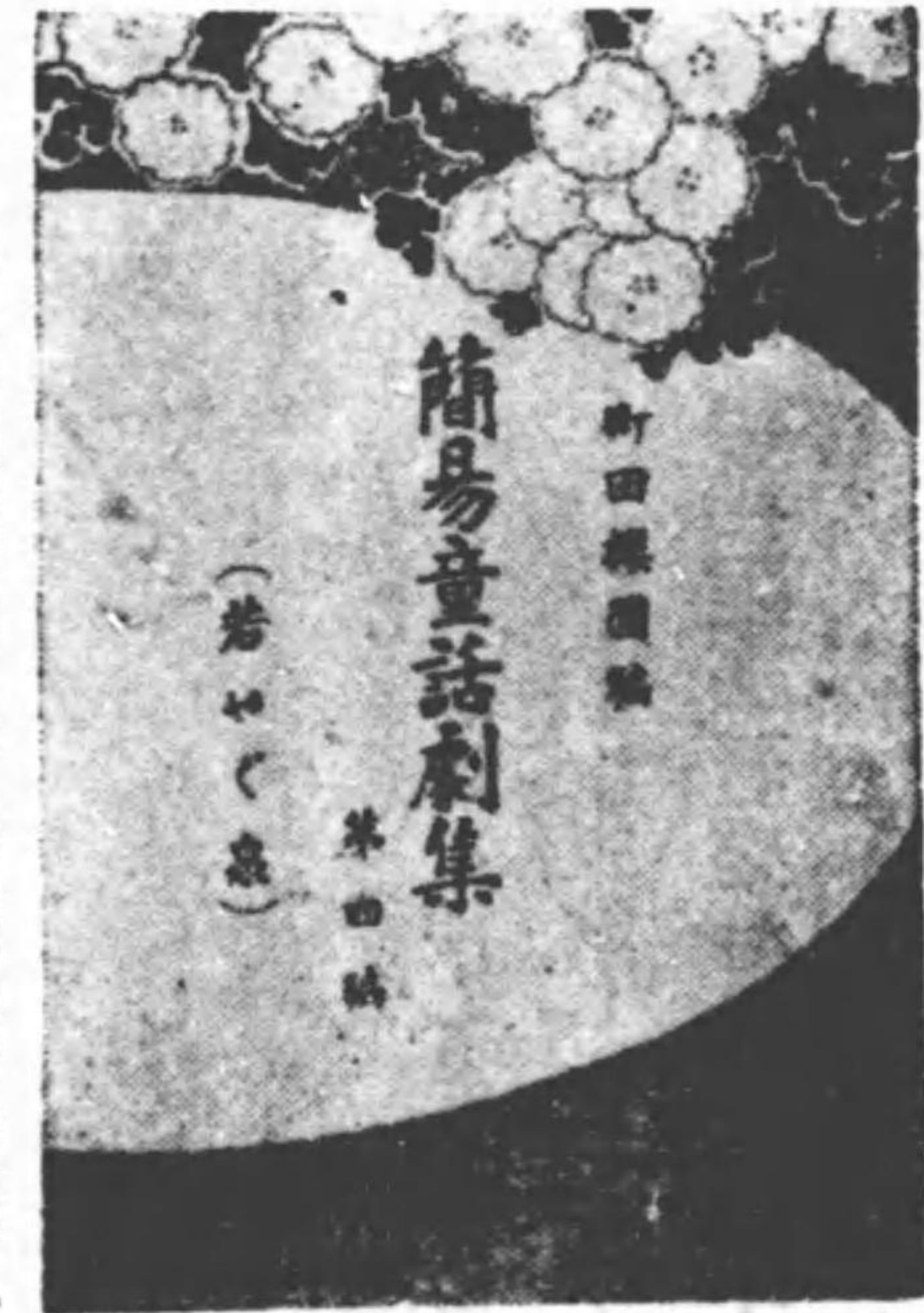
第六篇は尋常三年から四五年迄の程度のお兒さんの目標として二篇を選定の上アレンジしました。「にやん太郎の失敗」はグリムのお話から、また「まちがひなしのお爺さん」はアンデルセンのお話の中から抜きましました。何れも實演の上好評を博したものですから是非各種の會合に御實演を願ひます。



【第六篇】 ねこがきつねを助けたお爺さん



【第五篇】 はね子の手がら



【第四篇】 若やぐ



【第二篇】 羽の雪



【第三篇】 はたけの王様



【第一篇】 靴の主

小學新唱歌

町田櫻園先生苦心編著 (附錄 文部省小學唱歌略譜 入り)

改正國定教科書標準 小學新唱歌

生徒用 定價各十二錢 送料各四錢
教師用合本 定價金壹圓卅錢 書留送料金十八錢

小學唱歌は震後版を更めて出版し、新に附録として文部省國定唱歌中を採萃し略譜に改めて卷末に添へました。由來學校唱歌なるものは兒童の心的狀態を度外視したものが多く、爲に一方童謡等が努力を得るに至りました。これは已むを得ない現象として首肯するより外はないと思ひます。

とは云ひましても學校として現在流布しつゝあります童謡等をその儘、取り入れる事は如何かと思ひます。童謡の中には餘りに兒童に媚びり過ぎたものまた餘りに民謡的「曲に於ても」であるもの等ありまして、兒童の情緒を攪亂せしむるもの無きに非ずであります、そこで我が小學新唱歌は世に出たのであります。

小學新唱歌は國定唱歌以外に教科書と連絡を取り、然もその作歌作曲の上に於て前者後者の中間を行く程度に於て編纂したものであります即ち歌詞は平易に兒童に理解し得るべく、曲譜は趣味あり歌ひ易からしむる様注意を拂つたのです。

如上の目的を以て震災前出版致しましたところ兒童の唱歌教育に御熱心な諸彦より多大な好評を博し品切重版と版を重ねておりました所不幸の震災に原版を焼失し、幾多の困苦と戦いつゝ此處に改訂版を出版致しましたが近來本書が好評なるにつれ類似の書が多數出版されました。何卒御買求の際は町田櫻園編著盛林堂發行小學新唱歌と御注文下さいませ様切に御願致します。

小學新唱歌



第一年目次

心まし門山こいき
用さおのれだ
のなつかのうま
火おあがふうき
ら祭彌るふり綱判
く宿へま引裁
さお野かすあ地獄



第二年目次

隊りり正平車屋エ
な取清小んノチ
みぶ藤口ばミ
兵かこ加木汽一ネ
へ車舟犬狼みんほキ
うか
つとと
が電お猫鶴ぞお朝ユ



第三年目次

式宮び玉河事栗
兵川遊山
白一手のと
親北スお千火柿
宿一昌妻す艦夜力
お己の豊の水の
の保一も夏
雀塙保山く潜初助



第四年目次

千機花しれ本
行の本 日虹
梅飛Hほふ大
佛々り田會信み
大も柴謙
のうわ動杉
夏かめ運上な
奈蝶かか運上な



第五年目次

年牧仕べ別足明
歸奉ら
村會く
新山社化告違孔
踏山王清手海兵
野中 競鼓内強
馬、年戸國
舞吉空競少瀨富



第六年目次

犬ス海磨業日道
ス 卒の
獵コ航須祝今登
球か國川次皇め信
帝 三天 韓
東 十 德 瓦、
野の日利五仁あ張

町田園先編生

お伽歌劇

第一篇 舌切雀
第二篇 足柄山
第三篇 二ツ團子
第四篇 花橋の九柿太郎
第五篇 虹のかけ橋
第六篇 文取茶筌
第七篇 菊の山
第八篇 雪姫(雪月花)
第九篇 チューチュー小
第十篇 眠る王子
第十一篇 山羊の家
第十二篇 菊の山

お伽史歌劇

第一篇 小楠公
第二篇 八岐の大蛇(実業鳴尊)
第三篇 鞍馬山

對話唱歌

第一篇 花子さんと鳥
第二篇 小鳥の宿
第三篇 狐の巻
第四篇 狐の巻
第五篇 狐の巻
第六篇 狐の巻
第七篇 狐の巻
第八篇 狐の巻
第九篇 狐の巻
第十篇 狐の巻
第十一篇 狐の巻
第十二篇 狐の巻
第十三篇 狐の巻
第十四篇 狐の巻
第十五篇 狐の巻
第十六篇 狐の巻
第十七篇 狐の巻
第十八篇 狐の巻
第十九篇 狐の巻
第二十篇 狐の巻
第二十一篇 狐の巻
第二十二篇 狐の巻
第二十三篇 狐の巻
第二十四篇 狐の巻
第二十五篇 狐の巻
第二十六篇 狐の巻
第二十七篇 狐の巻
第二十八篇 狐の巻
第二十九篇 狐の巻
第三十篇 狐の巻
第三十一篇 狐の巻
第三十二篇 狐の巻
第三十三篇 狐の巻
第三十四篇 狐の巻
第三十五篇 狐の巻
第三十六篇 狐の巻
第三十七篇 狐の巻
第三十八篇 狐の巻
第三十九篇 狐の巻
第四十篇 狐の巻
第四十一篇 狐の巻
第四十二篇 狐の巻
第四十三篇 狐の巻
第四十四篇 狐の巻
第四十五篇 狐の巻
第四十六篇 狐の巻
第四十七篇 狐の巻
第四十八篇 狐の巻
第四十九篇 狐の巻
第五十篇 狐の巻
第五十一篇 狐の巻
第五十二篇 狐の巻
第五十三篇 狐の巻
第五十四篇 狐の巻
第五十五篇 狐の巻
第五十六篇 狐の巻
第五十七篇 狐の巻
第五十八篇 狐の巻
第五十九篇 狐の巻
第六十篇 狐の巻
第六十一篇 狐の巻
第六十二篇 狐の巻
第六十三篇 狐の巻
第六十四篇 狐の巻
第六十五篇 狐の巻
第六十六篇 狐の巻
第六十七篇 狐の巻
第六十八篇 狐の巻
第六十九篇 狐の巻
第七十篇 狐の巻
第七十一篇 狐の巻
第七十二篇 狐の巻
第七十三篇 狐の巻
第七十四篇 狐の巻
第七十五篇 狐の巻
第七十六篇 狐の巻
第七十七篇 狐の巻
第七十八篇 狐の巻
第七十九篇 狐の巻
第八十篇 狐の巻
第八十一篇 狐の巻
第八十二篇 狐の巻
第八十三篇 狐の巻
第八十四篇 狐の巻
第八十五篇 狐の巻
第八十六篇 狐の巻
第八十七篇 狐の巻
第八十八篇 狐の巻
第八十九篇 狐の巻
第九十篇 狐の巻
第九十一篇 狐の巻
第九十二篇 狐の巻
第九十三篇 狐の巻
第九十四篇 狐の巻
第九十五篇 狐の巻
第九十六篇 狐の巻
第九十七篇 狐の巻
第九十八篇 狐の巻
第九十九篇 狐の巻
第一百篇 狐の巻

菊倍版本譜 定價各金八拾錢
舞臺圖挿入 書留送料各金拾六錢
菊倍版本譜 定價各金八拾錢
舞臺圖挿入 書留送料各金拾六錢
四六倍判本譜 定價各金四拾錢
及ビ略譜入り 書留送料各金拾四錢

小學新唱歌

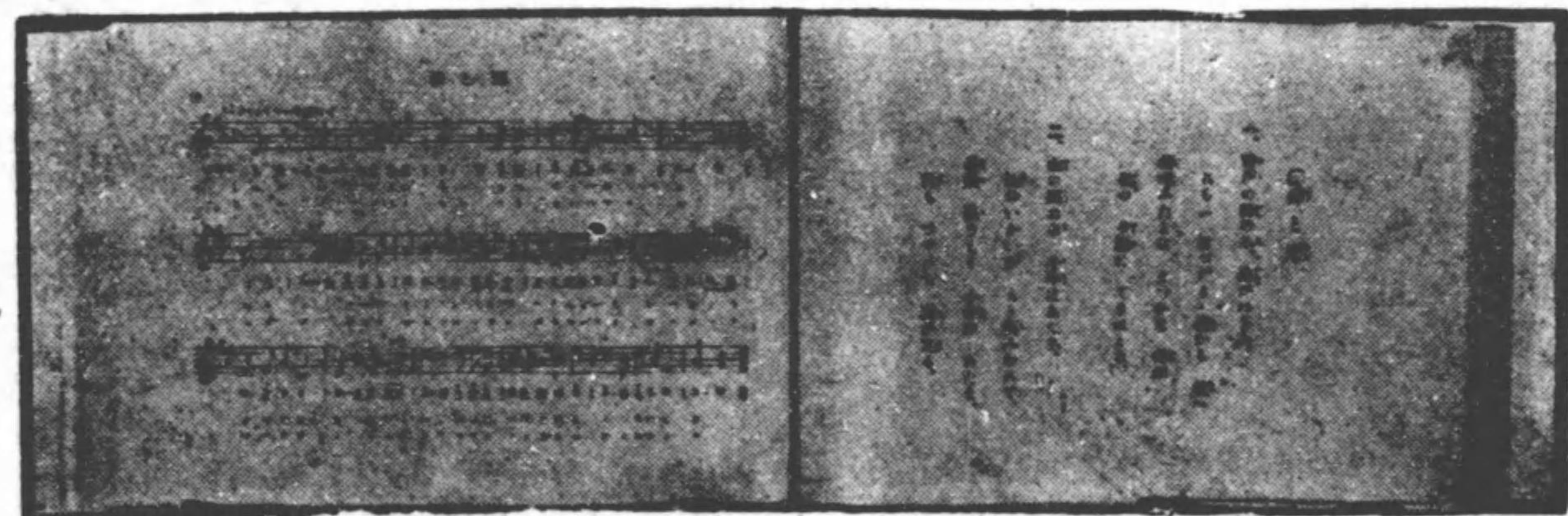


高一年目次
様伊敷光興人
今ふ朝村春小
山朝愛取ぜ
柄のの
足海母進か
鎮守に詣でて



高二年目次
窟出ぼ音別
のくれんの
土門か笛告
レオン
ボレオンの
夏を待つ
奈夏春熊

教師用尋常高等合本
クロス表紙箱入美本
定價 金壹圓卅錢
送料 金拾八錢



方組容内(用師教)歌唱新學小

本見容内ノ書本リヨ頁次

町田櫻園先生編

博覧會なるに、非常に華麗なる女子の表紙となつて居るの歌謡に、適する事、オルガン上の裝飾として、亦無比の良書である。

博覧會なるに、非常に華麗なる女子の表紙となつて居るの歌謡に、適する事、オルガン上の裝飾として、亦無比の良書である。

對話唱歌

第一篇 小楠公
第二篇 八岐の詩(兒島高德)
第三篇 鞍馬山

お伽史歌劇

第一篇 舌切雀
第二篇 足柄山
第三篇 二ツ團子
第四篇 文取茶チヌーチヌー
第五篇 瘤取チヌーチヌー
第六篇 山羊の家
第七篇 虹のかけ橋
第八篇 雪姫(雪月花)
第九篇 眠りの王子
第十篇 虹のかけ橋

お伽歌劇

第一篇 舌切雀
第二篇 足柄山
第三篇 二ツ團子
第四篇 文取茶チヌーチヌー
第五篇 瘤取チヌーチヌー
第六篇 山羊の家
第七篇 虹のかけ橋
第八篇 雪姫(雪月花)
第九篇 眠りの王子
第十篇 虹のかけ橋

菊倍版本譜 定價各金八拾錢
舞臺圖挿入 書留送料各金拾六錢

四六倍判本譜 定價各金四拾錢
及ビ略譜入り 書留送料各金拾四錢

小學新唱歌



高一年目次

山朝愛取山朝愛取
柄のの
足海母進か鎮守に詣でて

今ふ朝村春小
上義軍

様ゆ歌光與人



高二年目次

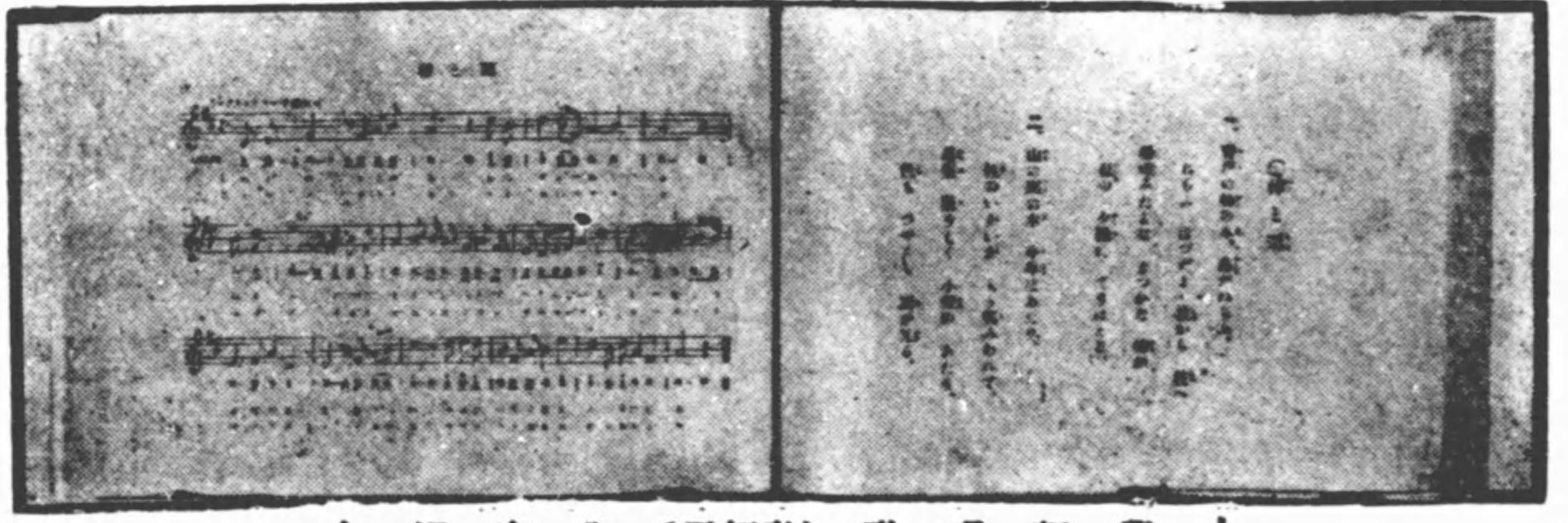
土門か笛告
のくれんの音別

ナポレオン
夏を待つ熊

原野が



教師用尋常高等合本
クローズ表紙箱入美本
定價 金壹圓卅錢
送料 金拾八錢



方組容内(用師教)歌唱新學小

本見容内ノ書本リヨ頁次

お伽歌劇



第九編 文福茶室

合な浮子りづた一く化
の場かの軽手屑打納け
好面れ曲業見屋の所た
餘はるに模せの所坊茶
興各無浮様の爲を主釜
種邪かの綱に助いで驚
會氣れ唯渡先けて驚



第八編 雪姫

好のり歌で夫をあ花雪
教公なもあが墓このの
訓演く曲つ果ふが都谷
劇に然もたしてれのの
で適も變らて來鳥虚雪
あし女化う幸たの榮姫
るた生極か福が後には



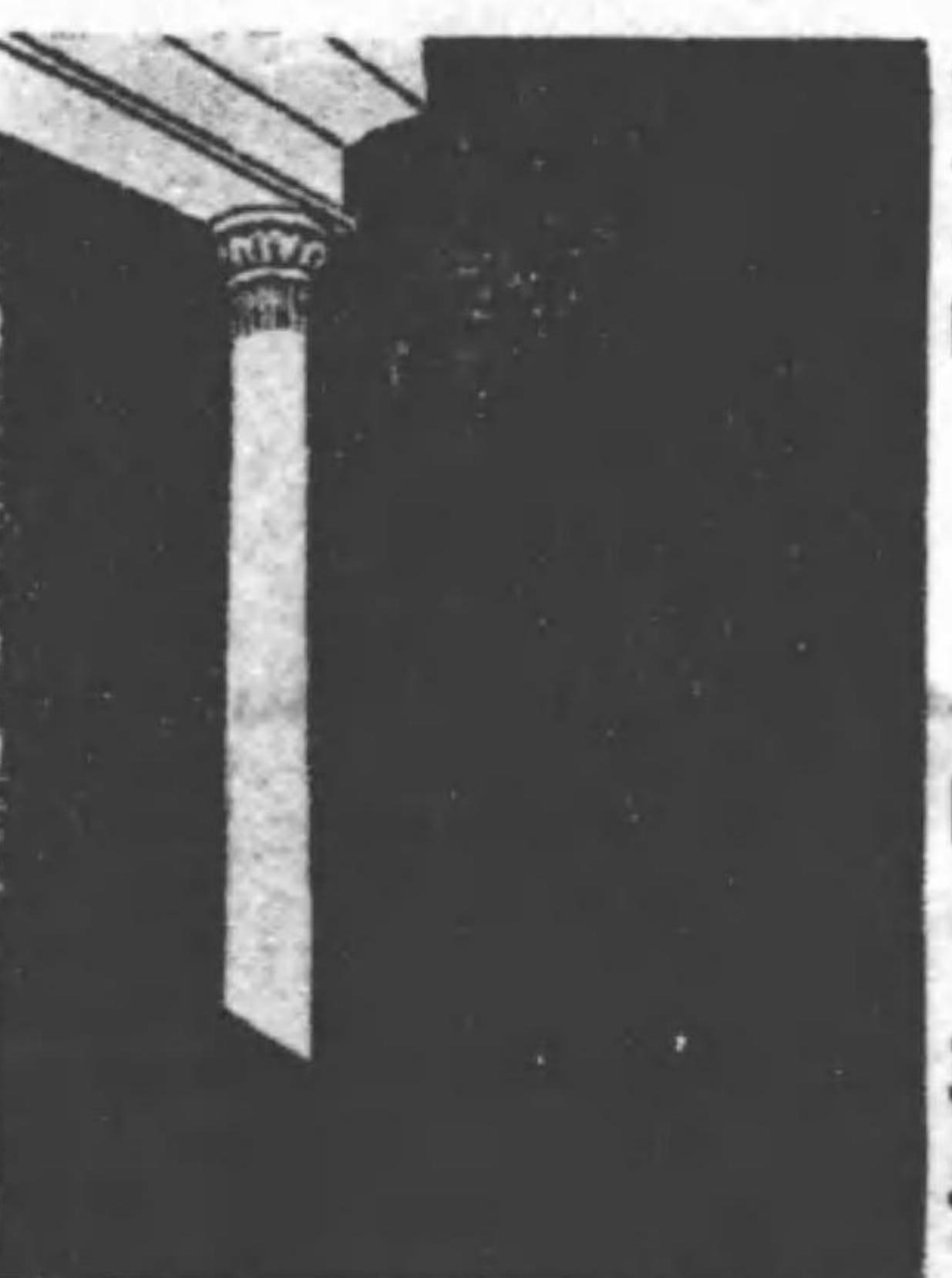
第七編 日の丸柿太郎

吹山京ま月快込五太桃
込印著た園なん大耶太
まレ音轟て歌だ嘶日耶
れコ機近評劇面を本な
たI社に判是白巧御ら
名F富はなもいに伽ぬ
曲に士東得花愉織の柿



第十二編 チューチュー小嵐

のキラ惠起がユ様劇可
好ユ比ついでのは愛
歌り轟たチ御こい
劇ビケがごぶユ家れ
ン來たら1來だ
活るくか小の大
躍やくら鼠チ黒歌



第十一編 眠り王子

何王いなさをなめ家足寝
し子かて碎さん來らて
てはがく申くま爲のぬも
覺と々々金し心眠く
めう覺起鳥てい配り
たくめき玉とてを王眠
如くなす魂心眠安子り



第十編 遠橋慶

かて律嘶や坊丸慶の得千
りもは勇んつと來橋ん本
心開壯御ちのかにも目
か快存や打、佇のの
躍た絶じん合るづと太
るだなの嬢ひ牛む五刀
ばけ旋おちは若辨條を

お伽歌劇



第三編 ニッ岡子

曲の脚作久うを穴爺げ轉
雲色歌留か受ではぬが
隠しか島御けど同團る
なてら武伽たんじ子團
得原著彦のでな鼠二子
た作者氏大あ待の人と
新者がの家ら遇洞の轉



第二編 足柄山

曲る無て姥下し角治だま
邪山とに逢力つ金さ
様氣を別見にや太か
苦に下れ出頼らい耶り
心演るをさ光藝てがか
のせ迄告れのづ歌鯉つ
編らなげ山臣くの退い



第一編 舌切雀

歌に一改に變りのらい昔
劇喝同心とつ滑くと々
采有すうた面稽ら輕の
な樂るお白振べい舌
博座迄化さや鷹の切
し公抑染の果雀とつ雀
た演第が群は踊鳥と重



第六編 窟取り

にクの者そ佐劇大歌最
是な一がの平瘡好劇近
非鬼曲苦舞爺を評に花
一のク心振の取の上月
奏叫ロのり喜ら御演團
なとテ神はびれ伽し少
共ス樂編た歌て女



第五編 二人浦島

曲や龍のすに皇の土に龜
魚宮面る船國浦産行に
ダで白後出の島にき乗
ンのいのを響と歸玉つ
ス草物浦せな是つ手て
の魚語島ん構かた箱龍
妙踊りととげら前を宮



第四編 花咲童

の花黒白る度面かもお
結の作作所う白す折殿
果咲ととへない村角様
やかいモ花い踊のの
如せふ1咲とり一花お
何競老一爺仰も同が花
にべ衆人のや見が咲見

お伽歌劇



第九編 福茶堂

合な浮子りづた一化
の場かの輕手層打納け
好面れ曲業見屋の所た
餘はるに模せの所坊茶
興各無浮様の爲を主釜
種邪かの綱に助いに
會氣れ唯渡先けて驚



第八編 姫

好のり歌で夫をあ花雪
教公なもあが墓このの
訓演く曲つ果ふが都谷
劇に然もたしてれのの
で適も變らて來鳥虛雪
あし女化う幸たの榮姫
るた生極か福が後には



第七編 日の丸柿太郎

吹山京ま月快込五太桃
込印著た園なん大郎太
まレ音最て歌だ嘶日耶
れコ機近評劇面を本な
たI社に判是白巧御ら
名ト富はをしいに伽ぬ
曲に士東得花愉織の柿



第十二編 チユーチユー小風

のキラ惠起がユ様劇可
好ユビ比ついのほ愛
歌Iリ壽たチ御こい
劇ビケがごユ家れト
Iン來たらI來だト
活るか小の大
躍や鼠チ黒歌



第十一編 眠り王子

何王いなさをなめ家足寝
し子：かて碎さん來らて
てはがI中くま爲のぬも
覺と々金しI心眠I
めう覺起鳥てい配りI
たIめき玉とてを王眠
如Iなす兎心眠安子り



第十編 逢橋度

かて律嘶や坊丸慶の得千
りもは勇んつと來橋ん本
心開壯御ちのかにも目
がい快存や打I竹のの
躍た絶じん合るづと太
るだなの嬢ひ牛む五刀
ばけ旋おちは若辨條を

お伽歌劇



第三編 ニツ岡子

曲の脚作久うを穴爺げ轉
賞色歌留か受ではぬが
讀しか島御けど同團る
なてら武伽たんじ子團
得原著彦のでな鼠二子
た作者氏大あ待の人と
新者がの家ら遇洞の轉



第二編 足柄山

曲る無て姥下し角治だま
ト邪山とに途力つ金さ
様氣を別見にやト太か
苦に下れ出頼らい耶り
心演るをさ光藝てがが
のぞ迄告れのづ歌鯉つ
編らなげ山臣くの退い



第一編 舌切雀

歌に一吹に變りのらい昔々
劇喝同心とつ滑くと々々
采有すうた面稽ら輕の
な樂るIお白振べい舌
博座迄I化さや鷹の切
し公抑婆の果雀とつ雀
た演第が群は踊鳥ト重



第六編 逢橋度

にクの者そ佐劇大歌最
是なIかの平癒好劇近
非鬼曲苦舞爺を評に花
一のク心振の取の上月
奏叫ロのり喜ら御演團
なとテ神はびれ伽し少
I共ス樂編Iた歌て女



第五編 二人浦島

曲や龍のすに皇の士に龜
魚宮面る船國浦産行に
ダで白後出の島にき乗
ンのいのを響と歸玉つ
ス章物浦せを是つ手て
の魚語島ん揚かた箱龍
妙踊りととげら前を宮



第四編 花咲雀

の花黑白る度面かもお
結の作所う白す折殿
果咲ととへない村角様
やかいモ花い踊ののの
如せふI咲とり一花お
何競老I爺仰も同が花
にべ爺人のや見が咲見

お伽史劇



第三編 虹のかけ橋

多る小てら狗すばに天か牛門
 若天の丸に祈願のつす
 天の丸に祈願のつす
 天の丸に祈願のつす



第二編 花子の手がら

眼が臣續いて
 眼が臣續いて
 眼が臣續いて



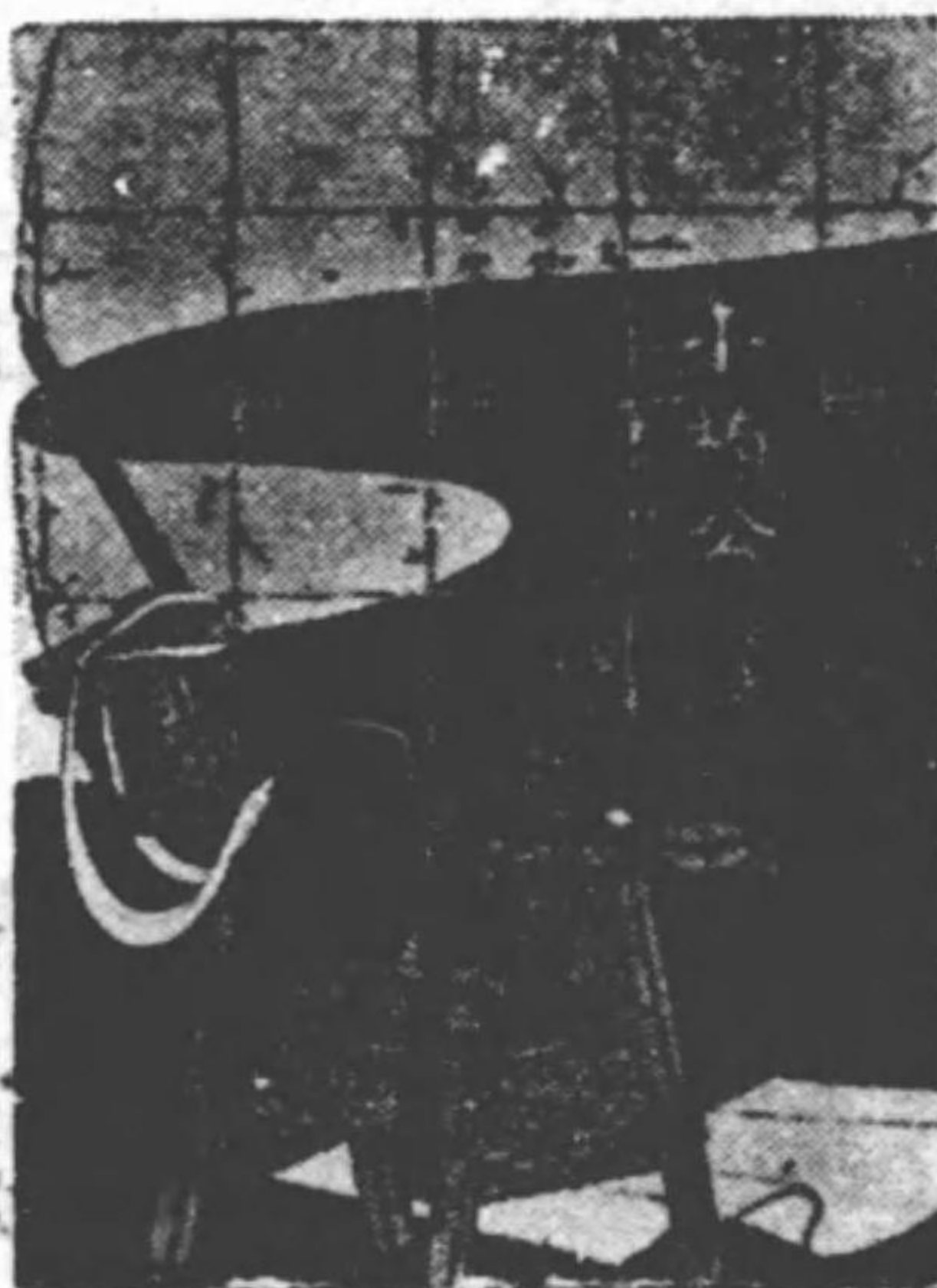
第一編 花子の手がら

御公一は加史
 御公一は加史
 御公一は加史



第五編 八岐の大蛇

先ず老筆を
 先ず老筆を
 先ず老筆を



第四編 小楠公

亡き父の
 亡き父の
 亡き父の

お伽歌劇

第十三編 花子の手がら

花子の手がら

第十四編 虹のかけ橋

虹のかけ橋

新刊

第十五編 山草の家

花子さんは何よりダンスが名人です、朝も夜も踊ります。ある夜お世さんのお留守に忍び入った盗人が花子さんのダンスの爲に失敗するといふ面白い歌劇

おめでたい會合に適した上品な面白い歌劇です。天のじやくが持逃げした光の鏡を取返してあげた虹のかけ橋その歌話のうつくしさ

舌切雀 第二場



お伽史劇



多る小てら狗すばらて
門牛か天には抑奥鞍
天若、狗追誠假誰州馬
丸に事拂面のそへ
祈に数とふ天を?下
願打多も借狗除か
すつせな天けく壯

續いて後固すか夜の主
備警を題のそのあす
三南の三す明上物様
朝郎武め二のけ語公
高士櫻句て御演色
忠徳の樹のの徴興し

御一公一戦りしり方
伽史別期あ最下涙編
歌呼の湊迄ある曲演
劇忠川場様のした
臣の面を血も常
のよ楠奮あ色のた



先ず老筆は岐治の歌
づる父がれのがす
悲母起策大のは
娘のみの略で蛇凄
ををににに絶に
性嘆面あるなる
と性嘆面あるなる

亡き父正の行首級
たきの父正の行首級
を自正の行首級
が論死すとの
奮る戦死すとの
公語を戦死すとの

お伽歌劇

第十三編

花子の手がら

花子の手がら

花子さんは何より
りかよりダンス
が名人です、朝
も夜も踊ります
ある夜お母さん
のお留守に忍び
入った盗人が花
子さんのダンス
の爲に失敗する
といふ面白い歌
劇

第十四編

虹のかけ橋

虹のかけ橋

おめでたい會合
に適した上品な
面白い歌劇です
天のじやくが持
逃げした光の鏡
を取返してあつ
ばれかけた虹の
かけ橋その歌謡
のうつくしさ

新刊

第十五編

山羊の家

舌切雀 第二場
化物



歌 唱 話 對



第九編 池

つはせせなら池鬼ふ寛
たうしい欺うがのおの
らまでだしか夫出そ池
うくそらたはるる
か欺のう従御本とし何
し従か者主當いと
終者 の人だふ池い



第八編 兎と狐

だるさつ故れか兎そさ兎
よさんた兎らつはのてを
にががつた如れこれ
面聞捕たか何らわら
白いまれ狐しはやふ
いてあなは折てれの狐
曲見龜か何角助た



第七編 黄金の斧

や方こ神元の正云れ二
非のれ様の斧直ふは人
御御も蛙通なべ白の
上會少のり慾方きと權
演合年活強は老黒夫
あに少躍水爺黄爺と
れば女のは金もそ



第十二編 鳥と鶏

さを風ら共づり、め夜
ん仕のれにらまかく見
方組御るかはすからえ
のん伽イた曉鼻話のぬ
餘だ話ソきののが鼻鶏
興御そツを空い話畫
劇子れブ取とたまこは



第十一編 猿の戯例

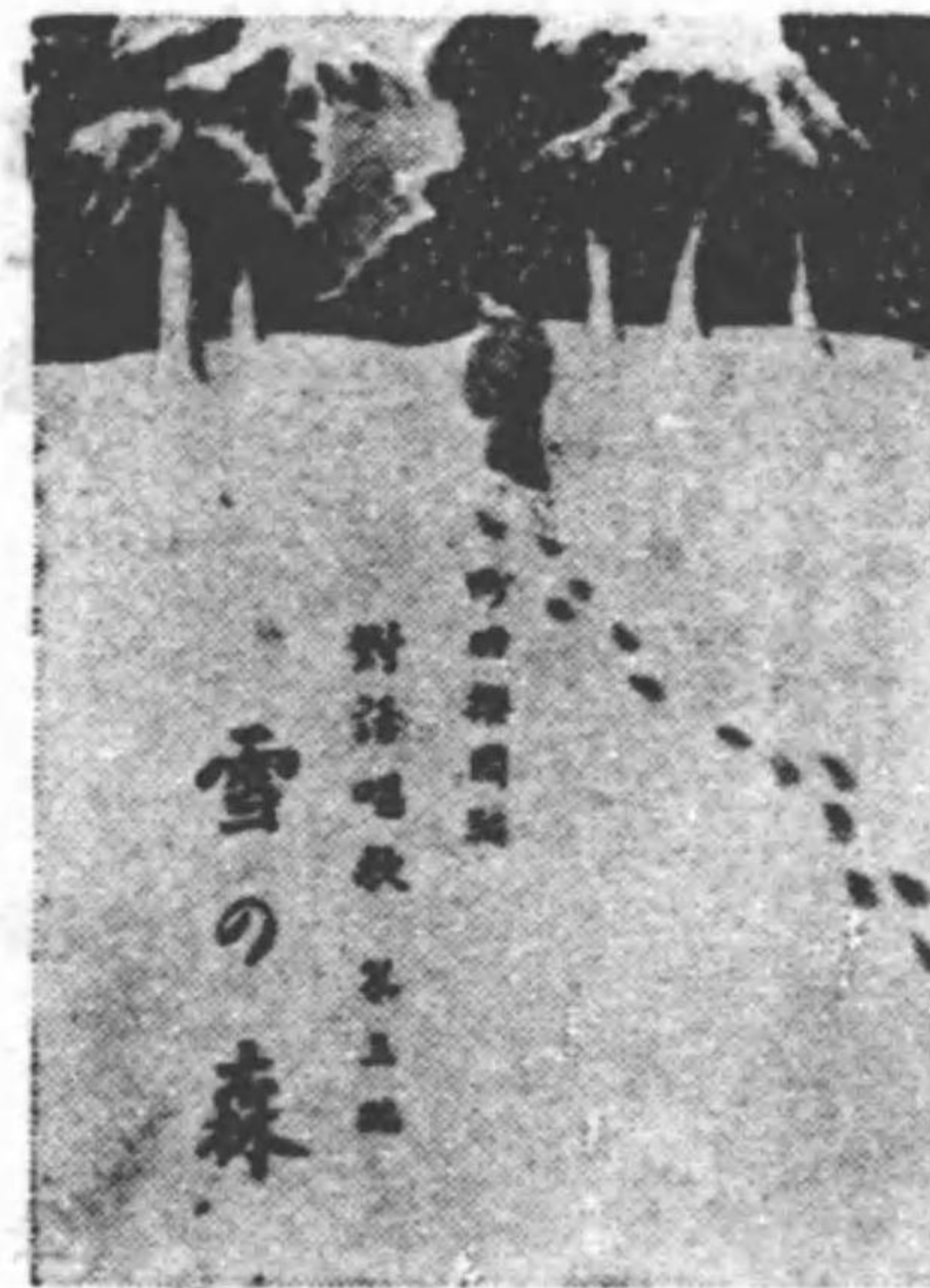
たおを判の惠所慾ちく肉
歌かとの赤のへともを
曲して滑つすこのど二拾
くも稽面ぐれ鉢つ匹つ
脚面さそれも合ちた
色加た悪せ慾どツ
白減裁猿智とつン



第十編 鳥の宮

響はるつくこと涙語哀
く樂鳩姿た見げ老にりれ
がの老すな婆救でな
響宮あ婆ほ音はす小
くへがら樂あれ娘
樂小輝しがれた此の
があ嬢けか響樂鳩小物

歌 唱 話 對



第三編 雪の森

變に十け理飾張色を佛
つ出二てと妹可し採國
た逢ヶ入せの憐たり童
話ふ月るす無の本巧話
との雪踏理一曲みか
い神のみを少はにら
ふ々森分無女矢脚材



第二編 宝守の娘

賜書の助のをよか波吹
へを喜け少滑動のらき
取びら女ぎし聲叫あ荒
つれそ出てふれれ
て先たのすが途助難る
叫づ水手可しにけ破風
ひ本夫に憐ト父て船と



第一編 花子さんと鳥

々にたら羽かたか日のな
々な學花ア草も花ま
つ校子ど鳥原足學子け
たにさんがへな校さの
か行んな二げ休んな
此くが事羽カ出まま
曲様まか三アしう今け



第六編 倭人形

まて動の皆欺らお對さ少
あしき問さしべ友語る女
ま出にんに達唱はの
つしへの俄まの歌はの
たてコお人ん人で好試
眠コ留形ま形す適演
つコ守とくこのな



第五編 狐と雲山子

らの狐かた大にに宮
うかなの中喜のもも士
捕動し歌賞上吹山
しへきが一劇讀演込レ
はる出が本をしみコ
誰し足山博て歌
だそてコの田し多劇



第四編 なまけ曹

もからお來落出すが雷
面くか嬢すちた居にも
白滑はさ可てが折るも
い稽れん愛上ま角とな
歌なて達い天ん夕見ま
曲しべににもま立えけ
かつか出とにま者

歌 唱 話 對



第九編 鬼の池

つはせせなら池鬼ふ甍
たうしい欺うがのおの
らまでだしか夫出そ池
うくそらたはるろ
か欺のう従御本とし何
し従か者主當いと
終者の人だふ池い



第八編 兎と狐

だるさつ故れか兎そさ兎
よさんた兎らつはのてを
にががつた知れこれ
面聞捕たか何らわら
白いまれ狐しはやふ
いてあなは折てれの狐
曲見龜か何角助た



第七編 黄金の斧

や是方こ神元の正云れ二
非のれ様の斧直ふは人
御御も蛙通なべ白の
上會少のり欺方きと權
演合年活張は老黒夫
あに少躍水爺黄爺と
れば女のは金もそ



第十二編 鳥と鷄

さを風ら共づり、め夜
ん仕のれにらまかく見
方組御るかはすらえ
のん伽イた曉鼻話のぬ
餘だ話ソきを空い話、晝
興御そつを空い話、晝
劇子れア取とたまこは



第十一編 猿の裁判

たおな判の惠所愁ち、肉
歌かとの赤のへとも二拾
曲して滑つすこのど匹つ
くも稽面ぐれ鉢つ匹つ
脚面さそれ合ち、た
色加のた悪せ愁どツ
し減裁猿智、とつン



第十編 鳩の宮

響はるつくしと、涙語哀
く樂鳩姿た見げ老にりれ
がの、老すな婆救でな
響宮あ婆ぼ音、はす小
くへ、小輝しがれた此の
樂があ嬢けか響樂鳩小物

歌 唱 話 對



第三編 雪の森

變に十け理姉張色を佛
つ出二てと妹可し採國
た逢ヶ入せの憐たり童
話ふ月るす無の本巧話
との雪踏理一曲みか
い神のみを少ばにら
ふ々森分無女矢脚材



第二編 燈臺守の娘

賜書の助のなをよか波吹
へを喜び少漕動のら、き
取びら女ぎし聲叫あ荒
つれそ出てぶれれ
つ先たのすホ途助難る
叫づ水手可にけ破風
ひ本夫に憐ト父て船と



第一編 花子さんと鳥

々にたら羽かたか日のな
々な學花ア草も花ま
つ校子ど鳥原足學子け
たにさんがへな校さの
が行んな二げ休んな
此くが事羽カ出ま、ま
曲様まか三アしう今け



第六編 俄人形

まで動の皆欺らお對さ少
あしき間さしべ友語る女
つし、の俄にに逢唱はの
たてコお人ん人で好試
眠ノ留形ま形す適演
つコ守とく、のな



第五編 狐と茶山子

らの狐、かのた大にに宮
うか、の中喜のもも士
しへ、捕動し、一劇讀演込
はる出、が本、をしみコ
誰、し、足山博て歌、
だそてコ、の田し多劇



第四編 なまけ雪

もからお來落出すが雪
面くか懐すちた、居も
白滑はさ可てが折るも
い稽れん愛上ま角とな
歌なて達い天ん夕見ま
曲しべに、もま立えけ
かつか、出とにま者

對話唱歌

第十三編 小鳥の宿



こどもか鳥か



獅子と兎



鳥かあおた木こ木たが
あいまもる宿めさあ
いをたいたさ小
かどおりのたさ小
人宿木がが鳥羽う
歌なしたもどしさをな
よ寒たつおのてんい小

森のむろの妖
恐れ鳥こし
にせんなるにどい
鳥にせんなるにどい
さらんすと可らな
るしさを鳥にせんなるにどい

盤をにたぬ
兎にたぬ
兎ふげに兎盤
はのく出をに
あめはのく出をに
智しれ兎ふげに兎盤

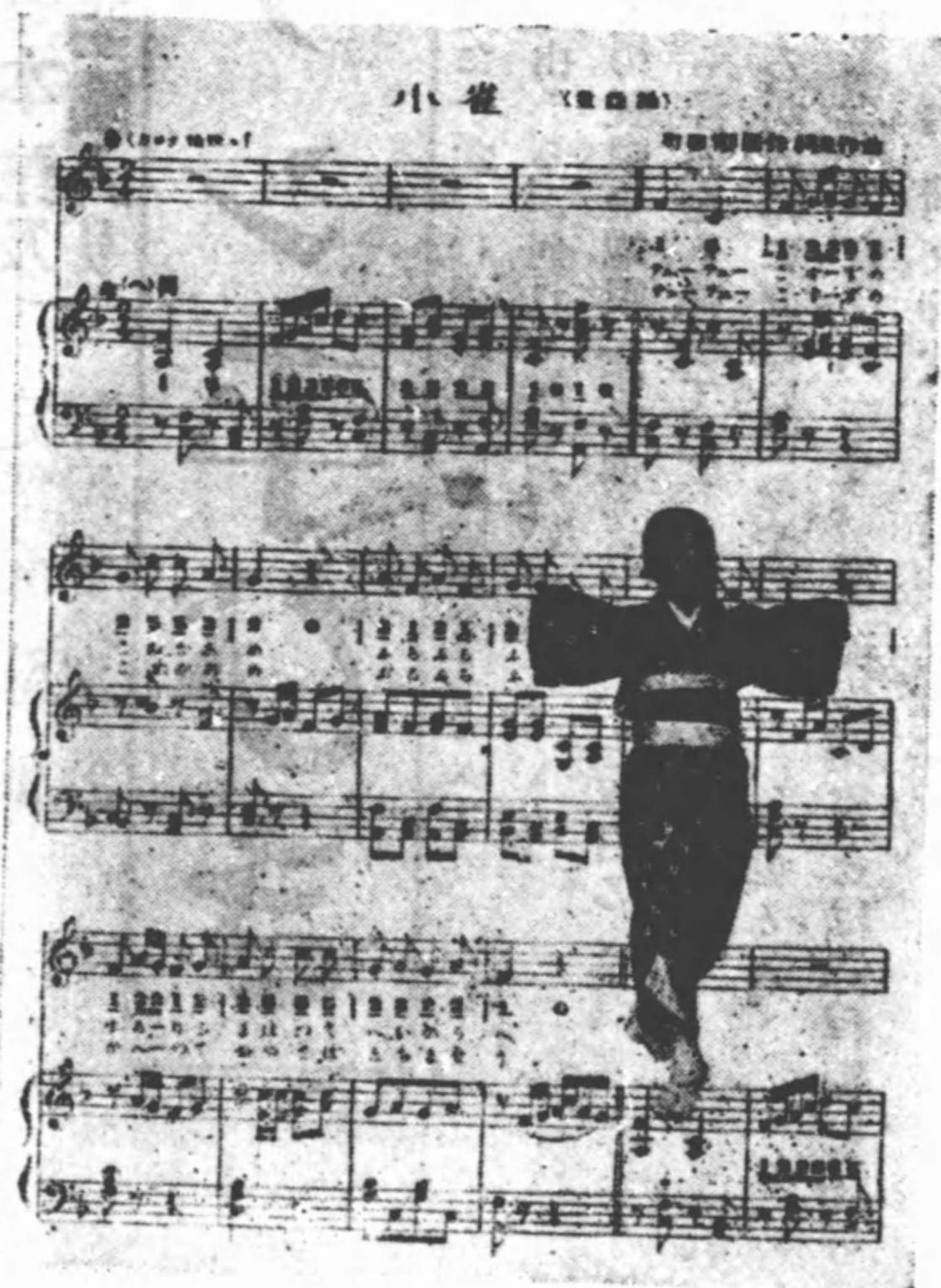
町田櫻園先生編 瀬川美知子女史振付

童謡踊小雀

菊判寫真版數十葉挿入
本譜略譜入り美麗なる表紙

【定價金八拾錢】
書留送料
金拾四錢

發賣以來大好評を博する本書は童
謡小雀家庭踊櫻ちる夜童謡ピヨ
ンピヨ蛙の三篇が收められてある。
直ちに演じ得らるゝ様一々詳細な
寫真に依つて其の説明が付してあ
る。何れも各篇實際に演じて好果
のあつたものである。



對話唱歌

第十三編

小鳥の宿



こどもか鳥か

か鳥おたあ
あ宿めさい
おともるをた
木はどいん
たはどりのさ
かどおりのさ
ん宿木が鳥
歌なしたもど
よ恵たつおの
てい小

第十四編



第十五編

獅子と兎



檻にをたに
出たにた
はのく捕
免ふげに
れはのく
しれはのく
智恵めるは
のく捕
面はのく
白犬か喰
いのは喰

森の妖
むろの
恐し妖
んは鳥
にせぬ
鳥にせぬ
さら鳥に
しさを
るしさを
かてんす
かてんす
かてんす

町田櫻園先生編 瀬川美知子女史振付

童謡踊小雀

菊判寫真版數十葉挿入
本譜略譜入り美麗なる表紙

【定價金八拾錢】

書留送料
金拾四錢

發賣以來大好評を博する本書は童
謡小雀、家庭踊櫻ちる夜、童謡ピヨ
ン、ピヨコ蛙の三篇が収められてある。
直ちに演じ得らるゝ様一々詳細な
寫真に依つて其の説明が付してあ
る。何れも各篇實際に演じて好果
のあつたものである。



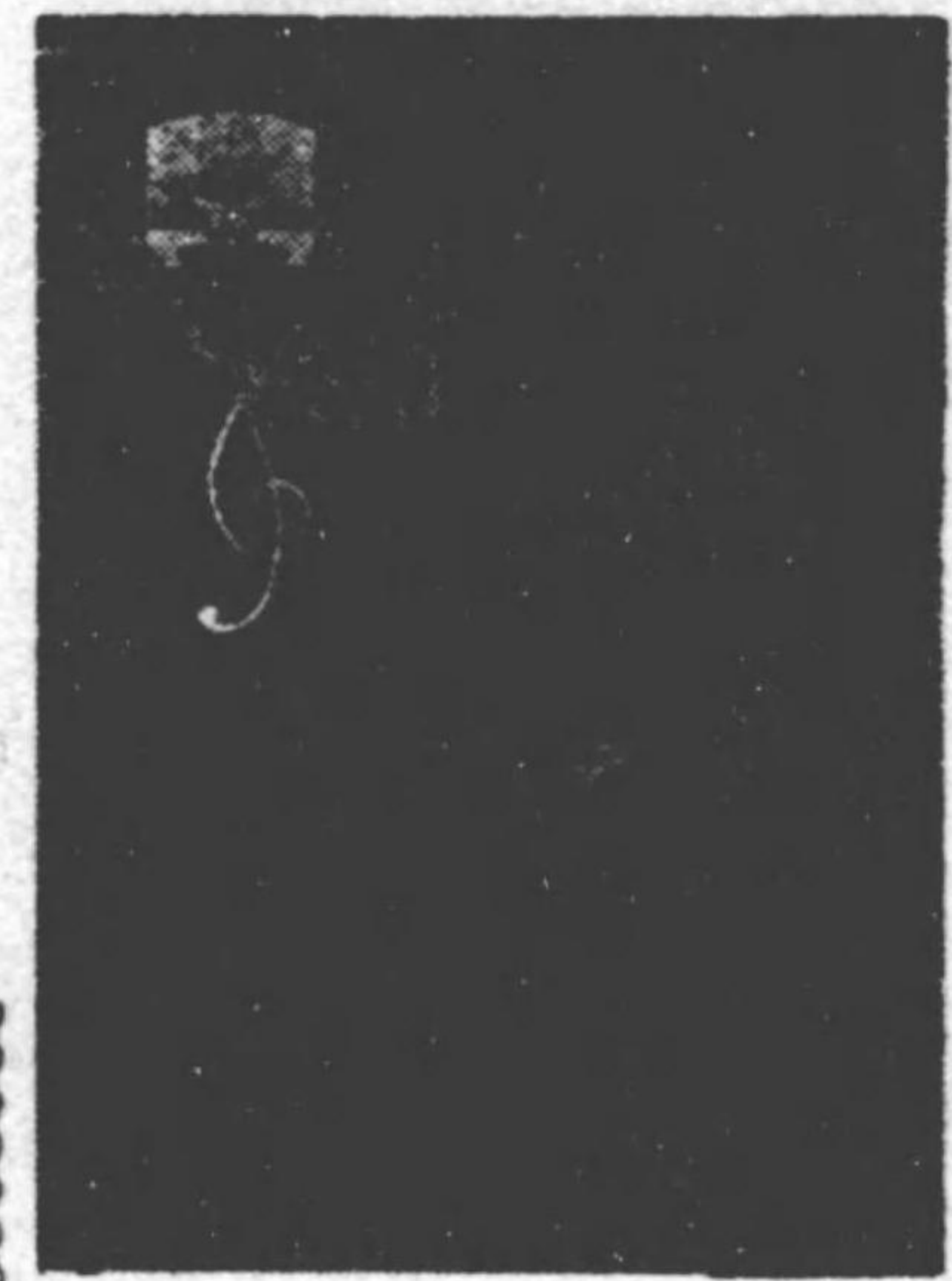
町田櫻園先生著

(菊倍判本譜及略譜説明圖入り)

定價金壹圓
郵税金拾六錢

改訂
邦樂
速成

ヴァイオリン手びき



- 一、ヴァイオリンはやつて見たいが、むづかしいと躊躇せらるゝ方。
 - 二、ヴァイオリン教科書は澤山あるが何れも解り難いといはるゝ方。
 - 三、ヴァイオリンで早く日本の長唄や端唄、箏の曲をひきたいと思召るゝ方。
 - 四、ヴァイオリンで楽しみながら洋曲をも味つて見たいと望まるゝ方。
 - 五、ヴァイオリンは習つてゐるが同時に面白い曲をやつて見たいと仰る方。
- 右の方々は是非此の書を御覧願ひたいのです。普通の樂書とは餘程編纂ぶりが變つてゐる所に御注意の上、精々御吹聴をねがひます。

町田櫻園先生著

【菊半ポケット形】

ハーモニカ妙曲集

定價金五拾錢
送料金四錢

- ◇斯く迄に歡迎せられたり!!
- ◇本書出づるや直ちに賣切れとなれり。
- ◇斯く迄に良獨習書ありや!!
- ◇解説丁寧親切にして一讀直ちに妙樂手となるべし。
- ◇斯く迄に樂曲豊富なり!!
- ◇清新なる洋曲舞踏曲進行曲等の數十を集録す。
- ◇斯く迄に價額低廉にして美装せる良書ありや!!
- ◇然してポケットに收め隨時隨所に開かるべし。

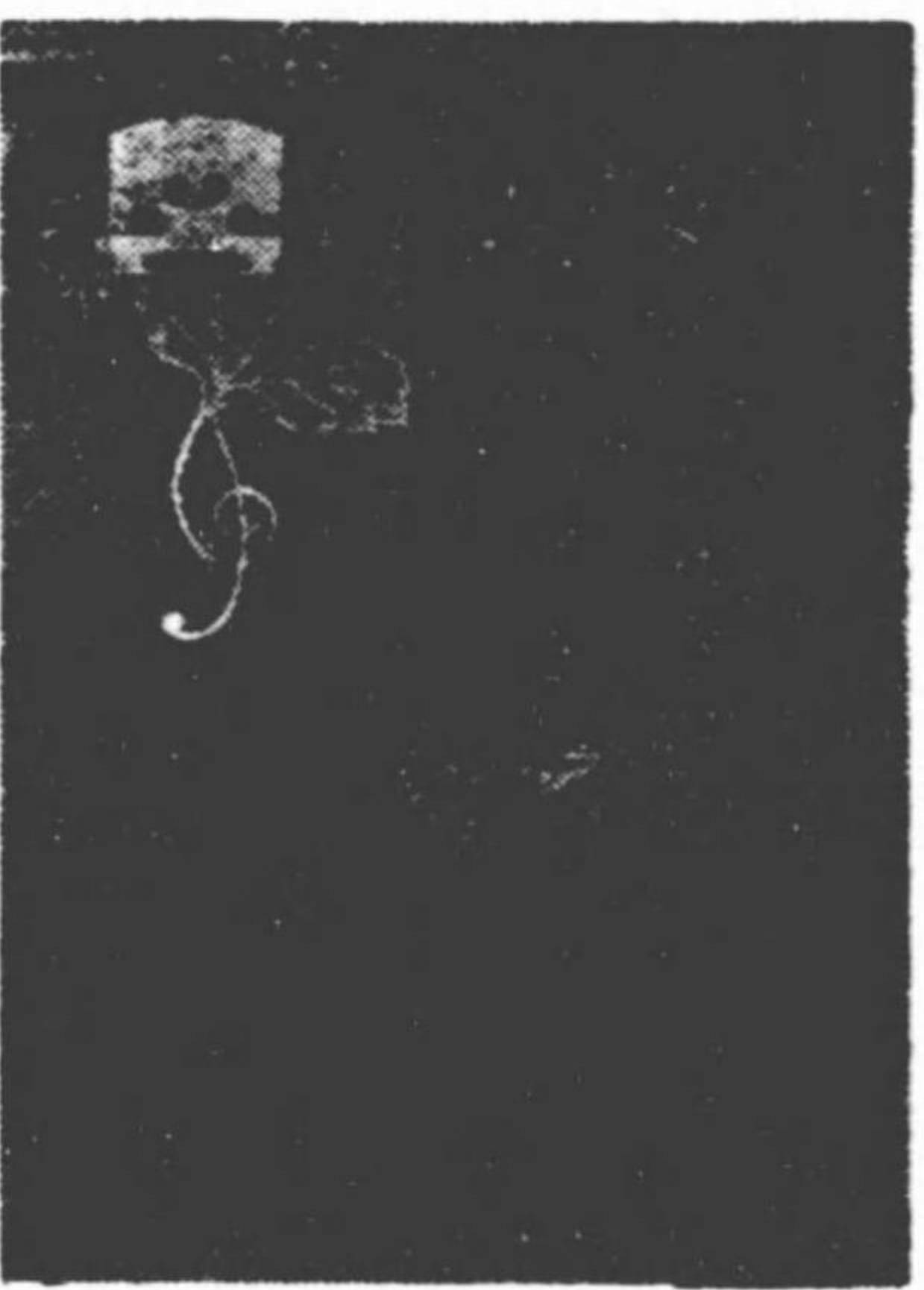
町田櫻園先生著

(菊倍判本譜及略譜説明圖入り)

定價金壹圓 郵税金拾六錢

改訂 邦樂 速成 新刊

ヴァイオリン手びき



一、ヴァイオリンはやつて見たいが、むづかしいと躊躇せらるゝ方。
 二、ヴァイオリン教科書は澤山あるが何れも解り難いといはるゝ方。
 三、ヴァイオリンで早く日本の長唄や端唄、箏の曲をひきたいと思召るゝ方。
 四、ヴァイオリンで楽しみながら洋曲をも味つて見たいと望まるゝ方。
 五、ヴァイオリンは習つてゐるが同時に面白い曲をやつて見たいと仰る方。

右の方々は是非此の書を御覧願ひたいのです。普通の樂書とは餘程編纂ぶりが變つてゐる所に御注意の上、精々御吹聴をねがひます。

町田櫻園先生著

【菊半ポケット形】

ハーモニカ妙曲集

定價金五拾錢 送料金四錢

- ◇斯く迄に歡迎せられたり!!
- ◇本書出づるや直ちに賣切れとなれり、
- ◇斯く迄に良獨習書ありや!!
- ◇解説叮嚀親切にして一讀直ちに妙樂手となるべし、
- ◇斯く迄に樂曲豊富なり!!
- ◇清新なる洋曲舞踏曲進行曲等の數十を集録す、
- ◇斯く迄に價額低廉にして美装せる良書ありや!!
- ◇然してポケットに收め隨時隨所に開かるべし、

308
434



京 東
行 發 堂 林 盛